

# 大学地域連携課題解決支援事業

## 2025 年度事業報告書



2026 年 3 月

環びわ湖大学・地域コンソーシアム

1. 草津市×滋賀大学.....	1
ビワイチ「歩育」のススメ～幼稚園で、親子で楽しもう～	
2. 東近江市×龍谷大学.....	5
過疎化地域での地域活性化の活動	
3. 大津市×びわこ学院大学.....	9
大学生に3つの授業実践力をつけるための 子ども向け科学実験・ものづくり教室の取り組み	
4. 滋賀県×びわこ学院大学.....	13
いのちの安全教育 ～Stop 性暴力・性犯罪～	
5. 東近江市×びわこ学院大学.....	16
スポーツ拠点を中心とした地域防災 ～みんなで考える地域の避難所運営～	
6. 東近江市×びわこ学院大学.....	20
一ひきこもり、育児ノイローゼから人々を救うー音楽セラピーとレクリエーション による子育て支援事業「0歳から楽しめる親子ふれあい音楽教室」	
7. 滋賀県×成安造形大学.....	25
滋賀県 CO2 ネットゼロ社会づくりの推進をテーマにした 児童向けワークショップデザインプロジェクト	
8. 大津市×成安造形大学.....	27
こども園児との日用品を応用した造形あそびワークショップ	
9. 東近江市×びわこ学院大学.....	30
東近江市 小学校体育元気アップ事業	
10. 長浜市×長浜バイオ大学.....	34
余呉の森の価値を生むエコシステム～持続的に学ぶことが可能な森の好循環～	
11. 彦根市×滋賀県立大学.....	38
♣サイがまた来た Re ♣サイ来る～ごみから資源へ 彦根発！循環型社会への挑戦～	
12. 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学.....	42
びわこいきいきプロジェクト～フレイル予防と社会的つながりを目指して～	
13. 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学.....	45
親子で楽しむリズムトレーニング～子ども達の運動能力向上を目指して～	
14. 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大.....	48
いきいき生活プロジェクトー笑顔でのばす健康寿命ー	
15. 東近江市×びわこ学院大学.....	52
学校部活動の地域展開に向けての仕組みづくり ～学校・地域・年代が繋がるスポーツ活動の場～	
16. 滋賀県×滋賀医科大学.....	56
高校生をはじめとする一般市民への出張型心肺蘇生(BLS)講習	
17. 大津市×滋賀医科大学.....	60
膳所・平野地域の思春期世代の子供たちがトラウマインフォームドな 大人たちと関われる、落ち着ける第三の場所づくり「あかり」	
18. 大津市×滋賀医科大学.....	63
じぶんごと Café	

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 1

プロジェクト名（活動テーマ）：ビワイチ「歩育」のススメ～幼稚園で、親子で楽しもう～	
SDGs 目標：	   
提案者	：滋賀大学教育学部幼児教育コース奥田ゼミ
自治体担当者	：草津市こども若者部・幼児課（東郷）
連携大学担当者	：滋賀大学教育学部 教授（奥田）

### 1. 取組体制

この取り組みの主体は、滋賀大学教育学部幼児教育コースの奥田研究室ゼミ学部生 4 名であり、この学部生がビワイチ歩育マップを作成する。次に、草津市内の子ども園でビワイチ歩育マップを活用していただき、実践を行う。

### 2. 背景・目的

近年、活発に体を動かす遊びや外で遊ぶ時間が減り、幼児の運動量低下や多様な動きの獲得の遅れが指摘されている。幼児期において、体を動かすことは、体力や運動能力の基礎を培う上でも重要な事柄である。また、丈夫な体づくりや意欲的な態度形成などさまざまな分野においても体を動かすことは大切であるといえる。そこで、今回この取り組みでは、草津市の遊び場や公共施設などを取り上げ、親子で歩き、体を動かす指標となる「歩育マップ」とそれに付随するガイドブックを作成する。この地図とガイドブックを活用し、幼稚園外の時間でも歩いたり体を動かしたりすることを促す。

### 3. 活動内容

本年度は 5 月より活動を開始し、草津市幼児課と連携しながら事業を進めた。まずは図 1 のガイドブックを作成するために草津市役所公園緑地課と協議のうえ、掲載する公園を 6 か所に選定した。利用者の多いロクハ公園や、住宅街に位置する青地児童遊園など、立地や特色の異なる公園を幅広く取り上げた。選定した各公園を実際に訪問し、トイレや駐車場の有無、周辺の商業施設・飲食店などの環境を調査するとともに、ガイドブック掲載用の写真撮影を行った。作成したガイドブックには図 2 のように、各スポットの写真や設備情報に加え、位置情報にアクセスできる QR コード、「おすすめポイント」「注意ポイント」などを掲載し、幼児と保護者が安心して利用できる内容とした。持ち運びしやすい冊子形式とし、実際の外出時に活用できるよう工夫した。

あわせて、子どもたちが楽しみながら運動に取り組めるよう、図 3 の「びわいちまっぷ」を作成した。1 日ごとにシールを貼って進められる形式とし、各地の特産物や観光名所の

イラストを取り入れることで、継続意欲を高める工夫を行った。2か月間の調査期間でゴールできる設定とし、達成感を得られる仕組みとした。また、1日の歩数と活動内容を記録できる歩数記録表も作成した。

これらの資料は、草津市内のこども園3園に協力を依頼し、5歳児の各家庭へ配布した。写真1のように園児の腰部分に万歩計を装着し、一日の歩数を計測して記録用紙に記入することで、個人および園全体で歩数を積み上げ、ピワイチ達成を目指す取り組みとした。これにより、歩数や運動量の増加だけでなく、親子で体を動かす機会の創出と、運動への意欲向上を図った。

活動期間中には各こども園を訪問し、子どもたちが実際に万歩計を装着して活動する様子を見学するとともに、教員から子どもたちの変化や保護者の反応について聞き取りを行った。10月および11月分の記録用紙を回収して分析を行い、その成果をまとめ、3月には草津市役所にて各園の副園長を交えた活動報告会を実施した。

図1：ガイドブック表紙



図2：ガイドブック内容



図3：びわいちまっぷ



写真1：万歩計装着時の様子



#### 4. 目的の達成状況、成果

本活動では、万歩計の活用やビワイチマップへの取り組みを通して、幼児の歩数増加および運動への意欲向上を目的とした。

歩数の結果を見ると、平日の平均歩数は比較的高い傾向にあった一方で、土日は平日を下回る結果となった。土日には公園へ出かけるなどして1万歩を超える日も多く見られたが、自宅で過ごす日もあり、活動量にばらつきが生じたことが平均値に影響したと考えられる。一方、平日はこども園での活動に加え、降園後に習い事や公園遊びに参加する家庭も多く見られたことから、安定して歩数が確保され、平均値が高くなったと推察される。

また、11月は風邪等による欠席や自宅療養が重なり、全体的に歩数が伸び悩む結果となった。体調不良という季節的要因が、活動量に影響を及ぼしたと考えられる。

一方で、保護者からは「11月になると前月よりも目標歩数を意識するようになり、達成すると喜ぶ姿が見られた」との声があった。これは、継続的に取り組む中で子ども自身の目標意識が高まったことを示している。また、親子で歩数記録表に記入したり、ビワイチマップにシールを貼ったりする活動を通して、家庭内で運動について話題にする機会が増え、主体的に取り組もうとする姿勢の育成につながったと考えられる。

万歩計の誤作動やリセットなどの機器上の課題もあり、数値目標の完全な達成には至らなかった。しかし、数値面だけでなく、子どもの目標意識の向上や運動への意欲の高ま

り、親子で取り組む機会の創出といった点において、本活動は一定の成果を上げたと評価できるだろう。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

この事業をきっかけに、万歩計というツールを使って歩くことを意識することや親子の触れ合いの時間をもつことにつながった。また、配布されたガイドブックを活用し、休日の過ごし方を工夫する家庭も一定見られた。

一方で、万歩計の不具合や幼児が使用するという点での物品選定については、配慮が必要であったかと思われる。

今回の取り組みがきっかけとなり、歩くことや体を動かすことの楽しさを感じたり、親子の触れ合いの時間がより充実したりすることを願う。

#### 6. 課題、懸案事項

本プロジェクトにおける課題として、まず万歩計についての課題が挙げられる。各園の副園長と万歩計の選定をする際、条件として、1. 数字が一目で見えるもの、2. 取り外しが簡単だが取れにくいもの（クリップタイプ）、3. 小さく軽いもの、が挙げられたため、この条件に見合うものを使用した。しかし実際に万歩計を子どもたちが使用する際、誤作動により実際の運動量よりも歩数が少なく記録されてしまう場合があった。また、子どもが万歩計に興味を持つあまり、意図せずリセットボタンを押してしまい、正確な歩数を継続的に把握することが難しくなる場面も見られた。そのため、リセットボタンを押さないよう促すなどして、子どもの運動意欲向上と正確な活動結果の両方を考えた支援を取っていくことが必要であっただろう。

また、子どもに対する関わり方についても課題が考えられる。こども園を訪問した際に、子どもたち一人ひとりと十分に関わりながら活動の様子を観察する時間を十分に確保できなかった点が挙げられる。さらに、歩数を増やすためにどのような運動や遊びを行えばよいのかについて、実際に見せたり一緒に行ったりしながら具体的に伝える工夫が不足していた。子どもに対する対面でのコミュニケーションを大切に、支援を充実させていく必要があると考える。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

### No. 2

プロジェクト名（活動テーマ）： 過疎化地域での地域活性化の活動	
SDGs 目標：   	
提案者	: 龍谷地方創生プロジェクト 椎木 啓仁
自治体担当者	: 東近江市役所・環境部 森と水政策課 課長補佐 松井 正人
連携大学担当者	: 龍谷大学法学部 教授 牛尾 洋也

### 1. 取組体制

私たちは、行政機関や地域団体と協力して地域振興に取り組んでいる。また、行政と地域機関の連携が希薄である場合に、私たちの団体が積極的に介入することによって、連携を強化し地域活性化の役割を担うこともある。さらに、私たち自身が関係人口の一部となり、地域のコミュニティに参加することで地域活性化が期待できる。地域のターゲットとなる世代を絞ることなく、全世代に等しく、地域参画ができるような取り組みを行っている。

なお、私たちの組織は、2年前にサークル化し、現在も運営している。後輩たちに円滑に引き継ぎ、持続的に地域とのかかわりを持とうとしている。また、組織としては、属人化することなく、全員が地域と密接に関われるような体制を築き、長い期間を見据えて成果をあげることを目指している。

### 2. 背景・目的

高野や君ヶ畑でのフットパスはこれまでの活動を引き継いだものである。しかしながら、関係人口増加のため、必要なものを考えたところ「滞在型観光」と「将来的担い手の育成」があがった。そこで、過疎農村地域での成功例が多い「農泊」の研究と設立を計画し、近畿農政局へヒアリング調査を行った。また、高校生対象に郷土教育や進路設計の総合学習のようなものを提供するため、滋賀学園高校の通常授業2時間を借りて、実現に至った。

### 3. 活動内容

主な活動は、フットパスイベントの開催やコースの作成である。他にも、地域イベントの参加や手伝いなども行っている。また、問題解決や研究のため、ヒアリング調査の実施や、現地調査、フットパス先進国の熊本での研修も行い、フットパスや地方創生について深めている。以下、特に成果を得ることができたと感じた活動内容を4つ紹介する。

## (1) 高野と君ヶ畑でのフットパス開催

2025年10月から永源寺高野町で始まった高野フットパスを今年も開催した。昨年とは異なる点として、今年には体験も絡めるフットパスを目指し、高野でも君ヶ畑でも体験型のフットパスを開催した。

高野フットパスでは、今年には紅葉の時期ではなく、12月14日の冬に開催だったことから、コースを少し変え、積もった雪などを楽しめるコースにした。また、古商家を改装した土間を染め場、蔵を機織り場、居間を食事や会話が楽しめる場とされている「游紫庵」でイベントを実施し、食事は地元の食材を使ったご飯を提供した。食事後は、2023年の大河ドラマ「光る君へ」でも紹介された「紫紺染め」の実演だけでなく、参加者にハンカチを配り、染めたものをプレゼントするといったことも行った。

君ヶ畑では、コースづくりや運営だけでなく、案内役も学生が行った。事前に君ヶ畑へ下見や打ち合わせを重ね、君ヶ畑ゆかりの「惟喬親王」や「君が代」伝説を調べ、ガイドを行った。食事は高野とは少し違い、木地氏ふるさと交流館において、我々学生と地元の方々、参加者全員で豚汁を作り、料理を行った。また、実演体験では、「木工体験」を行い、コースターやまな板、キーホルダーを作成し、プレゼントを行った。

高野、君ヶ畑といった自然や歴史、地域資源が豊かな場所で、フットパスだけでなく、伝統工芸品の実演体験を取り入れることによって、より地域を知ることができる機会になるのではないかと感じている。

## (2) 高校生とのコラボ企画（みらプロ）

我々は、既存のフットパスでの問題点として、参加者の高齢化、地元関係者の高齢化をあげた。そこで、将来的な担い手である若年層へのアプローチをかけることとした。「ほろ酔いフットパス」を派生させ、高校生を対象とした地元のスイーツ店を巡るフットパスを作り、イルミネーションの中を歩き、「EAST ★RAINBOW」の点灯式でゴールするといったものを計画した。その後、滋賀学園高校の吉田先生と打ち合わせを複数回行い、イベントにご協力いただけることとなった。

第一部として、12月12日（金）、滋賀学園高校において「みらプロ～私の未来と街の未来を考えるプロジェクト」を開催した。まず、2時間目に滋賀学園高校の生徒180人に体育館に集ってもらい、講義を行った。

内容としては、①私たち、龍谷地方創生プロジェクトの紹介、②私たちが思う東近江市の魅力、③大学ってこんなところ（(i)受験の方法、(ii)大学での学び、(iii)課外活動、(iv)就活について）、④龍谷大学の紹介の4テーマの講義を行った。①～③までは各学生が発表を行い、④では法学部・牛尾 洋也教授と先端理工学部・塩見 洋一教授が龍谷大学について説明した。

その後、3時間目は各教室に分かれ、事前に高校生に答えてもらったアンケートをもとに「東近江市版人生ゲーム」作成のためのワークショップを行った。ワークショップ内では、自分の将来の夢と、東近江市の名所や魅力などを議論し、様々なアイデアが生まれた。これをもとに我々は「東近江市版人生ゲーム」の作成に入った。

第二部として、12月20日（土）、東近江市八日市で高校生対象とした「まちカフェフットパス」を開催した。

内容としては、ほとんど「ほろ酔いフットパス」と同じものであり、八日市の名所を巡りながら、スイーツ屋さんを回った。当日、東近江市役所の会議室に集合し、第一部の「みらプロ」のワークショップをもとに作成した「東近江市版人生ゲーム」を行った。吉田先生など滋賀学園高校の先生方や東近江市役所、滋賀報知新聞社からも記者の方が来られ、参加者10名とともに盛り上がる事ができた。

コースは「ほろ酔いフットパス」とは少し変え、高校生に興味を持ってもらえそうな話題や名所を巡った。フットパスのゴールは、東近江市役所及び「EAST★RAINBOW」の点灯式の場とした。イベントの最後には、八日市商工会議所青年部の方々に本プロジェクトについてご紹介いただき、プロジェクトメンバー全員と参加者でステージに上がり、活動の宣伝を行った。当日の運営の委員会の皆様や市長にもご挨拶し、イベントを開催するだけでなく、地域との関係をさらに深める機会となった。

### （3）近畿農政局へのヒアリング調査の実施

地元の食材を使った「食」、フットパスに加え、「紫紺染め」や「木工体験」などの自然体験など、我々は様々な活動を行ってきた。次に注目しているのは、「宿泊」についてである。総務省の調べでは地方創生の要件として「食」、「宿泊」、「自然体験」があげられている。そのような中で、我々には「宿泊」の要件が足りず、「滞在型観光」への移行が急務であると考えた。

2024年に実施した熊本での研修では、フットパスに加え、宿泊施設、地域組織の連携がとても充実していることが学べた。そのため、我々も農村地域との親和性がある「農泊」設立に向けて動き出した。今年は、「農泊」や、地域組織を広くつなぐネットワークとなる「農村RMO」体制、農業と福祉（障害者支援）を掛け合わせた「農福連携」について研究し、12月10日（水）に農林水産省近畿農政局へヒアリング調査を実施した。我々が研究した中でさらに知見を深めたいことを伺うだけでなく、現状の政策についての提言も行った。今回学んだことを報告書にまとめ、高野や君ヶ畑など実現の可能性のある地域に対する報告会を開くことも予定している。

### （4）外部との連携

今年は、例年と比べ外部との連携がとても多かった。まずはメディアである。滋賀報知新聞社や東近江ケーブルネット（テレビ）をはじめとする機関に、イベントを取り上げていただいたり、取材していただいた。これらにより、東近江市での知名度が格段に上がったとも考えられる。

また、東近江市議会でも取り上げられた。我々の活動の歴史や現在行っていること、これからの展望を含めた資料を作成し、議会での答弁作成にも貢献した。

さらに、龍谷地方創生プロジェクトの活動の周知のための活動を広く行った結果、先日の「わがまち協働大賞」において優秀賞を受賞することができた。

#### 4. 目的の達成状況、成果

- ・高野フットパスや君ヶ畑フットパスにおいて、フットパスに加え自然体験プログラムを取り入れたことで、多くの参加者に興味を持っていただくことができ、形に残るものを提供できたことは成果であると感じる。
- ・「みらプロ」では、一つの高校の通常授業の時間に組み込めたことで、多くの高校生に我々の活動や龍谷大学を知ってもらえた。また、進路に迷っている高校生の相談に乗ったり、一緒に東近江市の魅力を考える場を設けることができたことは、将来的な担い手である若年層へのアプローチとしてかなり効果的なものであった。
- ・「まちカフェフットパス」では、「ほろ酔いフットパス」と同様に八日市の多くの店を知っていただく機会にすることができた。また、ワークショップをもとに作成した「東近江市版人生ゲーム」を実際にプレーすることで、自分たちの考えが反映され、その中で地元を知るといふ郷土教育を、アクティブラーニングによって実行することができた。
- ・メディアだけでなく、東近江市議会で取り上げられたり、「わがまち協働大賞」の優秀賞を受賞した。東近江市での地域活性化も議題に含まれていた議会の中で我々の活動を示すことができたことは、これまでにない成果である。また、東近江市民の投票によって優秀賞を受賞することができたことも大きな前進である。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

本市においては、「東近江市の森里川湖の原風景を未来につなぐエコツーリズム」を基本理念にエコツーリズムを推進している。龍谷大学のフットパスは、この理念に合致しており、学生が地域に入って取り組むことで、地域固有の魅力の再発見や保全、地域活性化につながっていくことに期待する。

#### 6. 課題、懸案事項



今回の事業での課題は、新しいものに挑戦したことで、守備範囲が広くなり、全体的に中途半端になってしまった部分もあったことである。各イベントはある程度成功したが、その過程で、確認不足な部分があったり、本番で想定外のハプニングが起きたとき、すぐに対応できなかったことがあった。また、「みらプロ」において高校生へのアンケートを取るときに、将来といったデリケートな部分に踏み込みすぎないといった教訓もあった。

今後は、今年新しく始めた4つの事業を永続的に取り組める体制を構築していきたい。特に、今年から始めたものはここから組織を成長させるための入り口であるものが多いため、しっかりと地域組織とも意見交換を行い、ガイドラインをしっかりと決め、我々の恒例イベントにしていきたい。また、さらに地方創生の研究を行い、その地域のニーズと我々の活動を併せて、さらに強固で、充実させた活動にできるよう組織運営を強化させたい。

以上

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 3

プロジェクト名（活動テーマ）： 大学生に3つの授業実践力をつけるための子ども向け科学実験・ものづくり教室 の取り組み	
SDGs 目標：	 
提案者	： 箱家勝規（びわこ学院大学 教授）
自治体担当者	： 久我真平（天津市科学館 指導主事）
連携大学担当者	： 岡崎孝文（びわこ学院大学・地域連携研究支援課 課長）

### 1. 取組体制

びわこ学院大学箱家ゼミの3回生、4回生の学生8名を中心に「科学館プロジェクトチーム」を立ち上げ、学生主体となった事業の推進を図ってきた。活動内容については、すべて大学主体で実施している。天津市科学館の指導主事と連絡協議を緊密に行い、スケジュール調整、成果、課題を明らかにしてきた。

大学内では、学生と指導者で活動の意義を話し合い、内容の検討、教材の選択、事前準備、リハーサル、本番、振り返りなどを綿密に行なってきた。



### 2. 背景・目的

【背景】小中学校の子どもたちの中には、理科嫌いや理科が苦手という現象が見られる。また、小学校教員の中には、理科の授業を専科の教員に任せている現状がある。このような状況の中、小学校教員を目指す大学生にとっては、理科の知識や技能を高めるだけでなく、理科授業の実践力を向上させることが重要な課題となっている。

【目的】「授業実践力」とは次の3つの力である。①「教材分析力」：使用する教材の特徴やその現象が起こる理由を理解し、子どもたちに何を学ばせたいかを明確にする力である。②「子どもの実態把握力」：目の前の子どもたちが何を知っているか、何に興味を持っているか、何ができて何ができないかを把握する力である。③「授業展開力」：導入で子どもたちの活動意欲を高め、活



動中に発言させ、考えさせ、気づかせる工夫をする力のことである。

これら3つの力を大学生にいかにか高めていくかが最大の目的である。

### 3. 活動内容

#### (1) 『わくわくサイエンス』:

親子20組を対象にした科学実験やものづくりである。毎回のタイトルに工夫を凝らし、子どもたちの興味が高まるようにしてきた。また、安全面を一番考慮し、終えたときに「楽しかった。また来たい」「家に帰ってもやってみよう」と言ってもらえることを意識してきた。

- ① 4月26日(土) 「おどれペンギン号」
- ② 5月17日(土) 「3・2・1 発射！」
- ③ 6月7日(土) 「あわ あわ パニック」
- ④ 7月5日(土) 「ふわふわ とろりん」
- ⑤ 9月6日(土) 「みずとあぶら」
- ⑥ 10月11日(土) 「すいすいキャッチ」
- ⑦ 11月8日(土) 「まぜるとどうなる」
- ⑧ 12月6日(土) 「ふわふわくらげ」
- ⑨ 2月7日(土) 「ふーせんでんわと音のふしぎ」
- ⑩ 3月7日(土) 「シュワシュワ大作戦」



#### (2) 『サイエンス屋台村』:

7月19日(土)大津市科学館最大のイベントで毎年館内全体を使って20あまりのブースが開設されている。

本学からは、「-196℃の世界」と称して、液体窒素の実験を6回実演し、約500名の子も達やその保護者に楽しんでもらった。普段なじみのない液体窒素をできるだけ子ども達にも楽しんでもらうため、安全面については最大限注意を払って実施をした。

#### (3) 『びわ学大実験教室』:

科学館展示ホール入館者を対象に、お盆明けの3日間、13時から15時まで、子ども達に科学実験やものづくりを楽しんでもらうびわ学主催のイベントである。

- ① 8月20日(水) 「ふわふわスライム」
- ② 8月22日(木) 「キラキラスライム」
- ③ 8月23日(金) 「ギザギザスライム」



展示ホールの入館者には「参加したいときに参加できる」ようにしたので、3日間の合

計で253人の子どもたちが楽しんだ。

(4)『スーパーわくわくサイエンス』:

参加応募してきた小学生36名に対して、90分間実験やものづくりを通して、科学の面白さ、不思議さを感じてもらおうものである。講師としては、教員が行い、学生は補助スタッフとして参加をした。

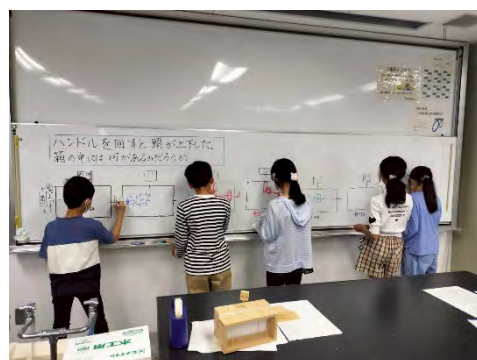
①9月20日(土):『科学のなぞを解き明かせーものが見えるとはどういうことかー』というテーマで実施した。ものがみえるには光が必要なこと、それが反射して目に届いていることについて実験を通して体感してもらった。



②2月14日(土):『ろうそくの科学』というテーマで実施した。ろうそくの炎の中には何があるのか、ろうそく自体は燃えないのになぜ燃えるのかななどを考え、実験を通してろうそくのなぞに迫った。

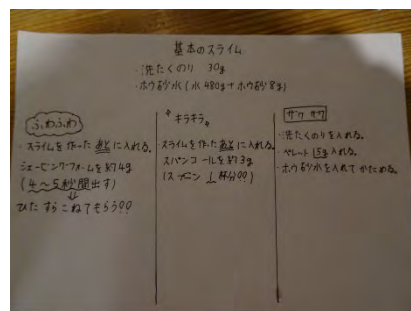
(5)『大津少年少女発明クラブ』:

5年生クラスは、「カムを使ったおもちゃづくり」「クランク機構を利用したおもちゃづくり」を年間8回、講師の指導方法や技術を学びながら、学生は子どもたちの手助けに務めた。子どもたちにカムやクランクを使った発想の豊かさにいつも驚かされた。



#### 4. 目的の達成状況、成果

①「教材分析力」:年間通して行った「わくわくサイエンス」や8月の3日間に実施した「びわ学大実験教室」では、毎回事前に実験を何度も行い、修正を繰り返してきた。特に、実験に必要な材料の分量、提示の仕方、実験の方法をリハーサルで何度も繰り返すことで、さらによりよい教材を探すことにつながったといえる。また、本番で予想外の展開になることが防げるのもこの教材分析のおかげである。糸電話の糸の代わりに長風船を使う発想になったのもこの教材分析力を高めたからである。



限られた時間内に活動を終了できることように毎回できたのは、事前準備でしていた教材分析の重要性が再確認できた。

②「子どもの実態把握力」:わくわくサイエンスの「あわあわパニック」とは、ペットボトルを半分に切り、雑巾を使用して大量の泡を作る実験である。このとき低学年の子どもたちの息を吐く力を考慮し、当初予定していたペーパータオルを雑巾に変更した。大学生は子どもたちの実験を考える際に、どうしても自分たちの基準で判断しがちである。しかし、ものづくりや科学実験をするときには、子どもたちが自分の力でどこまでできるのかを事前に把握しておく必要がある。例えば、



厚紙を細かなところまではさみで正確に切ることは小学校低学年では無理である。この活動は低学年に果たしてできるのか、高学年なら学校ですでに習っているのかなど、子どもの実態を把握する力が少しずつ育成できてきたといえる。

③「授業展開力」：教材研究を行い、子どもの実態把握ができて授業展開力が伴わなくては授業として成り立たない。どのような問かけが適切なのか、指示はわかりやすいか、子どもの発言にどのように返していくのかなど、瞬時に判断して進めていく必要があった。これら多くの活動を通して、子どもたちの自由な発言や予想外の反応にも対応できるよう



なってきたこと、子どもの安全面について予見できるようになったこと、時間内に子どもが楽しめる様に活動をつくることができたこと、子どもへの説明、指示の言葉を丁寧に考えるようになったことなどが成果である。「わくわくサイエンス」でおこなった第6回目の「すいすいキャッチ」は、ペットボトルの中の魚の浮沈子で輪っかを釣り上げるという「ものづくり」であった。ゲーム性を持たせるために、「2コ以上の輪っかをつかめた人、手をあげて」とか「どのグループが全員つかめますか」といった盛り上げる言葉がけをその場の雰囲気の中で臨機応変に伝えることができるようになったことは、その場で臨機応変に盛り上げる言葉がけができたことは大きな成長であった。

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

びわこ学院大学との連携は8年目を迎え、年々その内容は充実し、学生のレベルも着実に高まってきたと感じている。その理由として、まず1つ目に、3年生と4年生のゼミ生同士の学びのつながりが挙げられる。4年生がよい手本となり、その姿勢や技術を3年生が学び、自然に引き継いでいく様子が見られたことは大きな要因である。

2つ目に、学生が新しいことに挑戦しようとする姿勢が育ってきたことである。失敗を恐れず、子どもたちのためになると考えたことを何とか形にしようとする姿は、実践力を高めるうえで十分な原動力となった。

3つ目に、1年間を通して継続的に取り組みを行ってきた点が挙げられる。単発ではなく、わくわくサイエンスは年間10回、発明クラブは8回というように、継続して活動を積み重ねてきたことが、学生の力を確実に伸ばしたといえる。




今後も天津市科学館とびわこ学院大学との連携をさらに強化し、学生の授業実践力向上に貢献していきたい。

## 6. 課題、懸案事項

1年間で延べ26回以上の活動を継続し、その都度記録を残してきた。これだけの回数を積み重ねられたこと自体が、大きな成果であると考えている。さらに、この事業とは別に、11月には地域の小学生を大学に招き、学生主体で1時間の科学教室を開催した。どのような内容にするか、どんな材料を使うか、子どもたちに科学の楽しさをどう伝えるかを学生たち自身が検討し、丁寧に準備を進めた。その結果、小学生から高い満足を得ることができた。この科学教室は、2年間の取り組みの総決算ともいえる成果であり、学生たちの授業実践力が大きく向上したことを実感している。

2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 4

プロジェクト名（活動テーマ）：いのちの安全教育 ～Stop 性暴力・性犯罪～ 〔SDGs 目標番号： 目標 3、目標 4、目標 16 〕	
SDGs 目標：	  
提案者・組織・団体名：びわこ学院大学 BGU 若鮎隊 代表者の氏名：びわこ学院大学 3 回生 リーダー 山崎 朱莉 責任者 役職・氏名：教授 内藤 紀代子	
自治体担当者 役職・氏名	: 自治体・所属：滋賀県 総合企画部 県民活動生活課 : 主事 森 大毅
連携大学担当者 役職・氏名	: 大学・所属：びわこ学院大学 地域連携研究支援課 : 課長 岡崎 孝文

### 1. 取組体制

本事業の具体的な取り組みは下記の 4 点である。

- ①園や教育機関、イベントで、いのちの安全教育を行うため大学生が大学教員や専門員、滋賀県警察や滋賀県担当者から教育や指導を受ける。
- ②教育や指導を受けた大学生が現場で教育ができるようトレーニングを受ける。
- ③大学生が園や教育機関、イベントでいのちの安全教育を実施する。
- ④実施の評価を行い教育活動の今後の継続方法を検討する。



図 1 「いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪～」取組体制

## 2. 背景・目的

令和6年の滋賀県警察本部生活安全部の報告によると、性犯罪に関する対象事案は373件（令和5年288件）、子どもと女性に対する前兆事案は565件（令和5年562件）と報告され、昨年と比較しても減少傾向にあるとは言えない。社会として性暴力・性犯罪防止の強化が図られる中、依然として性暴力・性犯罪が見られる。

そのため、今年度もびわこ学院大学BGU若鮎隊の大学生が「いのちの安全教育」を園や教育機関、イベントで実施し性犯罪・性暴力の予防を図ることを目的とし活動の継続を行う。

## 3. 活動内容

昨年度は、①大学生がいのちの安全教育を行うための基礎的な教育・指導を、おうみ犯罪被害者支援センター（OVSC）の専門員から受け、②出前講義の場で現地教員や大学教員から助言を得ながら実践トレーニングを行い、大学生の実践力向上を図った。

今年度は、③依頼のあった2つの園（50名）と8つの教育機関（中学生383名・高校生1410名）において、大学生がいのちの安全教育を実施した。さらに、イベント「すまいるあくしょん」では安全教育カルタを行い（子ども67名・保護者56名）、大学祭では啓発ポスターを展示し（子ども101名・保護者233名）と広く啓発を行った。④実施後にはミーティングを行い、大学教員の助言のもと教育内容の評価とブラッシュアップを実施した。さらに、滋賀県思春期研究会でいのちの安全教育に関連した発表と助言を頂き課題を明らかにした。

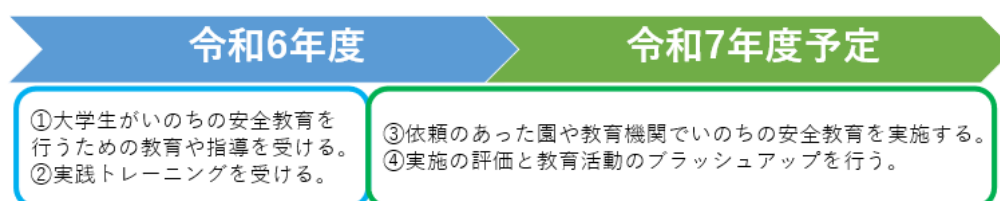


図2 「いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪～」の実施スケジュール



図3 イベントでの教育・啓発の様子(すまいるあくしょん・大学祭)

#### 4. 目的の達成状況、成果

成果として、この2年間で「いのちの安全教育」を通じ、子ども3183名と保護者329名に性犯罪・性暴力防止の啓発を行い、大学生自身の安全意識の向上にもつながった。

課題としては、社会の急速な変化により新たな犯罪や課題が予測されることから、時代のニーズに即した教育内容の更新が求められる。今後も滋賀県担当者、大学教員、おうみ犯罪被害者支援センター専門員、滋賀県警察サイバー犯罪対策課と連携し、教育内容のブラッシュアップと啓発の継続が重要である。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

この2年間、大学生が主体となり、自身の安全意識も向上させながら「いのちの安全教育」による啓発を各地で広く実施したことは、潜在化しやすい傾向がある子どもの性被害を予防するとともに、被害の早期発見、早期対応の実現にもつながる可能性がある極めて意義深い取り組みである。




人々が性被害に対する意識を見直し、被害者にも加害者にもならないよう、自分自身や一人一人を尊重できる安全で安心な社会づくりのため、今後もこうした活動が継続して実施されることを期待したい。

#### 6. 課題、懸案事項

懸案事項として、文部科学省が「生命<sup>いのち</sup>の安全教育」を推進する一方で、性教育（リプロダクティブ・ヘルス／ライツを中心とする教育）、包括的性教育（人権を基盤とする教育）、さらにプレコンセプションケア（将来の妊孕性を見据えた健康教育）など、目的や射程の異なる教育がそれぞれ推奨されている現状がある。これらは本来相補的な内容であるものの、位置づけや目標の違いが十分整理されないまま実施されると、子どもたちにとって理解が断片化し、混乱を招く可能性がある。したがって今後は、各教育の目的と内容を明確に整理・統合したうえで、性暴力や性犯罪から子どもたちを守る視点を基盤とした一貫性ある教育実践を構築していくことを課題としたい。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 5

プロジェクト名（活動テーマ）： スポーツ拠点を中心とした地域防災 ～みんなで考える地域の避難所運営～	
SDGs 目標：	  
提案者	：びわこ学院大学 学長 沖田 行司
自治体担当者	：東近江氏文化スポーツ部スポーツ課 北川 史也
連携大学担当者	：びわこ学院大学 スポーツ教育学科 高木 俊

### 1. 取組体制

本プロジェクトは、びわこ学院大学スポーツ教育学科の合同ゼミナールを基盤とし、大学・総合型地域スポーツクラブ・行政が連携して地域防災力向上を図る実践教育として位置付けている。今年度は、昨年度の取り組みを踏まえ、地域住民を主要対象とした「1 部制」イベントへ変更し、より多様な総合型クラブでも実施可能な汎用性の高い防災プログラムの構築を目指し実施した。

#### 【体制】

指導教員	高木（スポーツ教育学科長）/祐末（地域スポーツ・マネジメント担当）
大学側役割	全体運営・プログラム企画：祐末ゼミ（スポーツマネジメント等） 専門プログラム企画：高木ゼミ（スポーツ生理学 等）
クラブ側役割	能登川スポーツクラブ：企画受け入れ、会場調整、役員会での実施決議
行政側役割	スポーツ振興課：大学・クラブ間調整、広報物の相談

### 2. 背景・目的

東近江市には 7 つ（+1）の総合型地域スポーツクラブが存在し、スポーツを通じた交流や互酬性の醸成、地域課題の共有など、地域コミュニティの核となる役割を担っている。

また、総合型クラブが活動拠点とする体育館・スポーツ施設は、災害発生時には地域住民の避難所として機能する場所でもある。

能登半島地震など過去の大規模災害では、地域クラブや住民による初動避難所運営の事例が多く報告されている。昨年度の取り組みでは、クラブ関係者向けの防災プログラムを中心に実施したが、本年度は地域住民への対象拡大を図り、総合型クラブ自らが実施可能な“汎用型防災イベントモデル”の構築を目的とした。

さらに、今年度は会場・対象クラブともに国体開催に関連する制約から、当初予定より大幅なスケジュール変更が必要となった。この経験を踏まえ、さまざまな規模のクラブでも実施しやすい柔軟なプログラム設計を目指し実施を試みた。

### 3. 活動内容

#### 実施概要

日 時：2026年1月10日 午前  
対象クラブ：能登川スポーツクラブ

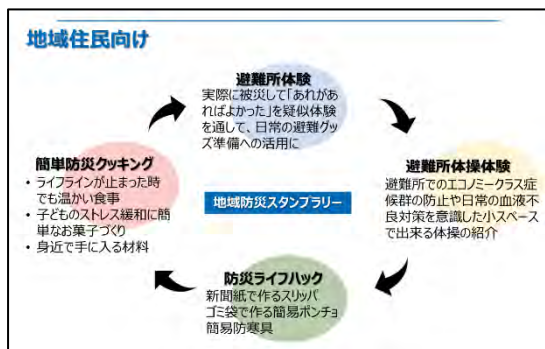
会 場：東近江市 能登川アリーナ  
協 力：東近江市スポーツ振興課

#### プログラム内容

今年度は1部構成（午前）の地域住民向け防災体験イベントとし、前年度午後プログラムの拡大版として設計した。

時間	プログラム名	対象	内容(案)
午前(3h)	地域防災ワークショップ(仮)	地域住民・親子・クラブ会員	生活に直結する「避難所体験」「簡易サバイバル飯」「家庭の備えチェック」など、誰でも参加しやすい体験型プログラム
同時進行	簡易サバイバル飯づくり	地域住民・親子	アイラップやカートンドック等、家庭でも実践できる調理法の体験
同時進行	避難所体験(居住空間)	地域住民	実際の避難スペースの体験、限られた空間の工夫紹介
同時進行	普段着でできる健康体操	地域住民	スペース不要で高齢者でも可能な運動紹介

#### プログラム内容の詳細



**簡易防災クッキング**

**POINT**

- ライフラインが普及してなくても温かいもの
- 日常にあるもの
- 生きるために食べるから脱する提案

**+** **防災ライフハック(新規)**

**POINT**

- 家庭で「明日からすぐ実践できる」備えの工夫を住民に体験してもらう
- 高齢者・子どもでも楽しみながら学べる「生活改善型の防災知識」として提供
- 参加後「帰ってから家の備えを見直してみよう」と思えることを重視

**運動プログラム**

エコミークラス症候群対策ストレッチ

狭い避難所で同じ姿勢が続くと、脚の血流が悪くなりエコミークラス症候群を発症する恐れがあります。症状が重い場合は呼吸困難や突然死につながります。対策として、下記のような運動をしてみましょう！

この運動を各種30秒ずつ行ってください。

**筋力低下対策のスロートレーニング**

避難所では、運動するきっかけ・習慣が減り、健康被害が起こることがあります。対策として器具不要で効果の高いスロートレーニングに挑戦してみましょう！

これらの種目を3秒で動かし、1秒止め、3秒で戻すという形で8回行います。1分休憩を入れて3セット行ってください。必ず秒数を数えながらゆっくりと、筋肉に力が入り続けた状態を心がけてください。

作成・配布物

「びわ湖大学・地域コンソーシアム」大学地域連携課題解決支援事業2025

## スポーツ拠点を中心とした 地域防災ワークショップ

～生活に直結する避難所運営をみんなで体験～

東近江市民の皆さまへ

### 地域防災スタンプラリー

地震や想定外と言われる豪雨被害が全国各地で起こり、防災への関心は高まりつつあります。「まさかこの地域で」「こんな準備しとけばよかった」「何十年住んでて初めて」など災害直後は沢山の情報や意識が高まりますが...ふと気がつけば日常に戻ってしまいます。実際に経験しないと分からないことは沢山あります。避難所での生活、救援物資が届くまでの食事、避難が長期に渡った時の対策など一緒に体験をして、ご家庭の避難準備にご活用ください!!

日時 2026年1月10日(土) 10:00～12:00  
※随時参加可 最終受付～11:30

場所 能登川アリーナ (〒521-1225 東近江市山路町2225番地)

内容 参加費無料

申込 下記のQRコードからお願いします。〆切 12月26日(金)  
当日受付も可能ですが、先着プログラムは事前申し込みを優先致します。

#### 簡単防災クッキング 先着順

- ① ビニール袋で蒸しパン
- ② 防災カレー

※ 準備の関係上、数に限りがございます。先着50名限定

#### 避難所体験

実際の体育館に作られた避難所空間を体験できます。  
例)タンボールベッド/簡易トイレ 仕切り居住スペース など

#### 防災ライフハック(新規プログラム)

いざという時のライフハック!!  
避難所で簡単に作れるスリッパや防寒着、使い捨てお皿などを一緒に作ってみましょう。



主催 びわこ学院大学  
協力 東近江市文化スポーツ部 スポーツ課  
NPO法人能登川スポーツクラブ

【お問合せ】びわこ学院大学 祐末(すけ末)ゼミナール  
0748-22-3388(代表)  
h-sukesue@biwakogakuin.ac.jp

本イベントは、びわこ学院大学 スポーツ教育学科で地域スポーツマネジメントとスポーツ科学を学ぶ2つのゼミナールが大学の学びと地域の課題解決を繋げる「びわ湖大学・地域コンソーシアム」にチャレンジして企画している事業です。

地域防災スタンプラリー

## 能登川アリーナ

### 体験して わが家の防災力をアップしよう

防災イベント

2026 1/10(土)

東近江市 避難所一覧

我が家の防災計画 (地産糧)

災害用備蓄品 非常用持ち出し袋



地域防災スタンプラリー

## 能登川アリーナ

### 体験して わが家の防災力をアップしよう

防災イベント

2026 1/10(土) 10:00～12:00

知るだけじゃ守れない。体験して、備えて、行動できる家族に!

避難所体験体験  
防災ライフハック体験  
避難所体験  
防災クッキング



当日の様子



#### 4. 目的の達成状況、成果

本事業は、総合型地域スポーツクラブを拠点とした地域防災力の向上と、クラブが主体となって実施可能な汎用型防災イベントモデルの構築を目的として実施した。今回の取り組みは昨年度に続く2回目の実施であり、準備段階から大学・クラブ・行政間の連携が円滑に進み、当日のプログラム運営についても全体を通してスムーズに実施することができた。当日は、避難所体験、簡易サバイバル飯づくり、家庭の備えチェック、健康体操など、生活に直結した体験型プログラムを実施し、地域住民が防災について身近に考える機会を提供することができた。特に、スタンプラリー形式の参加カードの裏面に家庭で役立つ防災情報を掲載したことに対して、参加者から「自宅でも確認してみたい」「家族と共有したい」といった反応があり、防災意識の啓発につながる工夫として一定の効果が見られた。また、参加者からは「定期的に開催してほしい」といった意見も寄せられ、本取り組みが地域住民にとって有意義な学びや交流の機会となったことがうかがえる。さらに、本プログラムは防災だけでなく、食育や健康づくりなどにも応用可能な内容であり、総合型クラブのみならず自治会や地域団体でも実施可能な汎用性の高い地域プログラムとしての可能性が確認された。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

本事業は、総合型地域スポーツクラブを拠点として地域防災について考える機会を創出した点において、大変意義のある取り組みであったと考えています。スポーツ施設は平常時には地域住民の交流や健康づくりの拠点として機能していますが、災害時には避難所としての役割を担う重要な地域資源でもあります。

本事業を通して、地域住民が避難所体験や簡易調理などの体験型プログラムを通じ、防災を身近な課題として考えるきっかけを提供できたことは、地域防災意識の向上につながる有意義な成果であると感じています。また、大学・総合型地域スポーツクラブ・行政が連携して取り組むことで、専門的知見と地域資源を活かした実践的なプログラムが実施できたことも大きな成果の一つです。



今後は、本事業で得られた知見を活かしながら、総合型地域スポーツクラブが地域コミュニティの拠点として防災分野にも関わっていく可能性を探るとともに、関係機関と連携しながら持続可能な地域防災活動の展開につなげていきたいと考えています。

#### 6. 課題、懸案事項

本事業を通じて一定の成果が得られた一方で、いくつかの課題も明らかとなった。まず、イベント形式で実施する場合の集客については依然として難しさがあり、地域住民への周知方法や参加動機を高める広報の工夫が必要である。また、本取り組みは大学とクラブの連携により実施することができたが、クラブ単体で継続的に実施していくには人的・組織的な負担が大きい可能性がある。そのため、今後の継続的な展開に向けては、行政の防災担当部署や地域のNPO団体などと連携した体制づくりが重要になると考えられる。特に、防災というテーマはスポーツ分野にとどまらず地域全体に関わる課題であることから、総合型クラブを地域拠点の一つとして位置付けながら、行政・地域団体・大学が協働して取り組む仕組みを構築していくことが、今後の課題であり懸案事項である。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 6

プロジェクト名（活動テーマ）： —ひきこもり・育児ノイローゼから人々を救う— 大学参画と地域連携による子育て支援	
SDGs 目標：	 
提案者	：びわこ学院大学短期大学部児童学コース 竹下ゼミ
自治体担当者	：東近江市企画部及び東近江市地域振興事業団 上山哲夫
連携大学担当者	：びわこ学院大学短期大学部児童学コース 講師 竹下則子

### 1. 取組体制

◎東近江市企画部及び東近江市地域振興事業団

公益財団法人東近江市地域振興事業団は、東近江市(教育委員会)からの委託を受け、年間約100超の生涯学習講座を実施している。そのうちの 하나가「親子で楽しむ0歳からの音楽教室」事業であり、びわこ学院大学短期大学部児童学コース・竹下ゼミと連携して実施した。

◎びわこ学院大学短期大学部児童学コース竹下ゼミ

びわこ学院大学短期大学部児童学コースの竹下ゼミは上記事業団より地域連携講座として依頼を受け、この活動に参加した。

### 2. 背景・目的

人口減少や超高齢化を受けて、ひきこもり、育児ノイローゼが問題視されている。これらを防止することを活動目的とし、びわこ学院大学短期大学部、同学生が生涯学習講座（公財東近江市地域振興事業団主催）で学ぶ人々と交流することを通して、人々の地域活動への参加、生きがいづくり、活力ある地域コミュニティの形成、まちづくりに資する。

### 3. 活動内容

びわこ学院大学短期大学部は公益財団法人東近江市地域振興事業団と連携して実施している生涯教育の取り組み「親子で楽しむ0歳からの音楽教室」の事業は、東近江市立「あかね文化ホール」を会場に、ゲストによる音楽演奏、ピアノ伴奏による合唱、子どもの楽器体験、音楽レクリエーション、リトミックなどを通して、良質な演奏を聴く機会を提供するとともに、乳幼児の情操教育に寄与することで地域住民の心身の健康に貢献した。

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』1

日 時：2025年5月24日(土) 開 演：15:00～15:45

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)

ゲスト：SIESTA(ユーフォニウム&サクソ)

★プログラム

1 手遊び 2 絵本読み 3 ユーフォニウム&サクソ演奏 4 楽器遊び

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』2

日 時：2024年7月27日(日) 開 演：15:00~15:45

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

ゲスト：マリンバ奏者 井塞鈴菜

★プログラム

1 ふうせんのうた 2 絵本読み(大型絵本) 3 マリンバ演奏

4 シフォンスカーフ遊び 5 マリンバ演奏 6 楽器体験

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』3

日 時：2024年9月27日(土) 開 演：15:00~15:45

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

ゲスト：わたむきリコーダー隊「リコピン」

★プログラム

1 手遊び 2 絵本読み(大型絵本) 3 リコーダー演奏 4 シフォンスカーフ遊び

5 リコーダー演奏 6 楽器体験

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』4

日 時：2024年11月15日(土) 開 演：15:00~15:45

ゲスト：RiUH(ヴァイオリン, ヴォーカル, ピアノ)

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

★プログラム

1 ピアノ演奏 2 絵本読み(大型絵本) 3 歌っておどろう

4 手話で歌おう 5 楽器体験 6 ソプラノ独唱 7 じゃんけん遊びをしよう

8 ヴァイオリン独奏 9 楽器体験

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』5

日 時：2024年1月24日(土) 開 演：15:00~15:45

ゲスト：saxorhythm(ソプラノ、テナー、アルト、バリトンのサクソ奏者)

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

★プログラム

1 ピタゴラスイッチ 2 絵本読み(大型絵本) 3 歌っておどろう

4 ぼよよん行進曲 5 楽器体験 6 さんぽ 7 アンパンマンマーチ

8 こぶたぬきつねこ 9 楽器体験

#### 4. 成果

①この活動を通して、子どもを持つ保護者の子育ての不安を緩和し、音楽コンサートを通して親同士の相互交流、子育ての相談や情報提供などの援助が行える場を提供することができた。また子どもたちは、ゲストの演奏する様々な音楽を聴いたり、様々な楽器を直接手に取って演奏したりすることで、集中力や思考力などの力が身につくとともに、「感じたことを表現する」機会を持つことができたのではないかと推察できる。演奏者や保護者、子どもが音楽を通して直接ふれあい、双方向性も大切にすることで、保護者の子育て不安の解消や親子のコミュニケーションづくり、子どもが成長する上での貴重な経験であったと考えられる。

②大学生においてはリーダーシップの育成、地域住民との関りによるコミュニケーション能力の育成、保護者への相談、支援や援助を行うための保育者としての資質能力の育成、音楽的技術能力の向上などが育まれたと考えられる。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

幼児期の音楽体験は、「言語能力」「感受性」「運動能力」「社会性」などのプラス効果が期待できると言われています。この事業は「多彩な楽曲を選曲することで、大人にも楽しんで頂ける内容とする」「演奏者とのふれあいを大切にする」「ぐずっても喋ってもOK！で安心して、気軽に参加できる」を大事にしている欲張りな音楽会です。

参加者からは「子育て中でなかなかコンサートに行けないが、0歳でも来やすいこのような機会をつくっていただき嬉しい。楽しい時間でした。」「子供が色々な楽器に触れる機会となってよかった」等の声の好評を頂いており、今後の更なる展開に大いに期待しています。

#### 6. 課題、懸案事項

①チラシ配布などの宣伝や周知について課題がある。

②対象年齢が0歳児～6歳児までの幅広い年齢層を対象としているため、プログラムの構成が難しかった。



## 0歳からの楽しい 親子ふれあい音楽教室

対象年齢：0歳～6歳

マリンバによるジブリやディズニーの音楽を聴いてみませんか？  
マリンバの演奏体験もできます!!




ゲスト  
マリンバ奏者 井塞鈴菜さん




プロデュース ピアノ  
竹下則子さん

2025  
**7/27**  
15:00～15:45

プログラム

- ♪ ジャンボリーミッキー
- ♪ さんぽ
- ♪ アンダーザシー
- ♪ 幸せなら手をたたこう
- ♪ にじ

あかね文化ホール(大ホール)

受講料 大人 ¥ 300円  
          子ども ¥ 200円



お問合せ あかね文化ホール  
0748-55-0207 教室への参加予約・質問・リクエストはこちらから!!  
当日、直接参加もOKです。

## 0歳からの楽しい 親子ふれあい音楽教室

対象年齢：0歳～6歳 (小学生も参加可能です)

リコーダーの演奏にあわせて歌ったり踊ったりしませんか？  
いろいろな楽器の演奏体験もできます!!




ゲスト  
わたむきリコーダー隊「リコピン」




プロデュース ピアノ  
竹下則子さん

2025  
**9/27**  
15:00～15:45

プログラム

- ♪ ビタゴラスイッチ メドレー
- ♪ アンパンマンのマーチ
- ♪ ねこふんじやった(楽器遊び)
- ♪ となりのトロ
- ♪ いつも何度でも

あかね文化ホール(大ホール)

受講料 大人 ¥ 300円  
          子ども ¥ 200円



お問合せ あかね文化ホール  
0748-55-0207 教室への参加予約・質問・ご要望はこちらから!!  
当日、直接参加もOKです。

## 0歳からの楽しい 親子ふれあい音楽教室

対象年齢：0歳～6歳 (小学生も参加可能です)

歌とピアノとバイオリンの演奏にあわせて歌ったり踊ったりしませんか？  
大きい絵本の読み聞かせや楽器遊びもできます！




ゲスト  
RiUH




プロデュース ピアノ  
竹下則子さん

2025  
**11/15**  
15:00～15:45

プログラム

- ♪ 子犬のワルツ
- ♪ 大きな栗の木の下で
- ♪ おもちゃのチャチャチャ(楽器遊び)
- ♪ 美女と野獣「愛のとびら」
- ♪ 情熱大陸のテーマ

あかね文化ホール(大ホール)

受講料 大人 ¥ 300円  
          子ども ¥ 200円



お問合せ あかね文化ホール  
0748-55-0207 教室への参加予約・質問・ご要望はこちらから!!  
当日、直接参加もOKです。

## 0歳からの楽しい 親子ふれあい音楽教室

対象年齢：0歳～6歳 (小学生も参加可能です)

サクソフォンの演奏にあわせて歌ったり踊ったりしませんか？  
大きい絵本の読み聞かせや楽器遊び体験もできます！




ゲスト  
Saxorhythm




プロデュース ピアノ  
竹下則子さん

2026  
**1/24**  
15:00～15:45

プログラム

- ♪ ビタゴラスイッチのテーマ
- ♪ ぼよん行進曲
- ♪ さんぽ
- ♪ アンパンマンのマーチ
- ♪ こぶためぐつねこ

あかね文化ホール(大ホール)

受講料 大人 ¥ 300円  
          子ども ¥ 200円



お問合せ あかね文化ホール  
0748-55-0207 教室への参加予約・質問・ご要望はこちらから!!  
当日、直接参加もOKです。

2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 7

プロジェクト名（活動テーマ）： 滋賀県 CO <sub>2</sub> ネットゼロ社会づくりの推進をテーマにした 児童向けワークショップデザインプロジェクト	
SDGs 目標： 	
提案者	: 成安造形大学 総合領域 非常勤講師 小野真紀子
自治体担当者	: 滋賀県・総合企画部 CO <sub>2</sub> ネットゼロ推進課 主事 中村優希
連携大学担当者	: 成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 講師 田口真太郎

1. 取組体制

成安造形大学総合領域 3 年生：ワークショッププログラムの開発と実施を担当。  
滋賀県地球温暖化防止活動推進センター（淡海環境保全財団）、滋賀県 CO<sub>2</sub> ネットゼロ推進課：内容監修とサポートを提供。  
大津市内の小学校：実施場所を提供し、児童の参加を促進。

2. 背景・目的

本助成金事業は、美大の授業で制作した児童向け環境学習教材と体験プログラムを、授業内に留めず実社会で活用できる形に昇華することを目的とした。これにより、成果物が教育現場で実際に役立つものとして展開されることを目指した。

3. 活動内容

①ワークショップの改善

〔ワークショップ1「ぶんべつぽいぽい」〕

前提：前期授業期間内の 2025 年 7 月 23 日に、仰木の里東小学校学童クラブ（大津市）の児童を対象にワークショップの実践を行った。1-2 年生 20 名が参加した。

成果：カードゲーム方式で、出てきたカードに書いてあるゴミをどのように分別したらよいかを検討し、成功するとコインがもらえるという内容である。ゲームを通して、子どもたちが分別を行い、成功すると嬉しそうな声が上がっていた（上写真）。

課題：カードやコインなどの備品を多く使うため、机の上が散らかってしまうなどの問題が見えた。また、振り返りを行うデザインが不足していたため、行動変容につながる可能性についての課題が見えた。学生たちは授業最終段階で「お片付けのための箱を作りたい」と発表した。

発展：この実践を踏まえて、2025 年 11 月 8 日に日本デザイン学会学生プロポジションでポスター発表を行った（下写真）。学会では、行動変容への橋渡しのデザインについてのご意見を多くいただいた。具体的には、振り返りのファシリテーション、振り返りのできる持ち帰り冊子などである。



## ②ワークショップの手順等をまとめた紙面デザイン

2年間を通して、デザインされたワークショップの手順等をまとめ、オンラインでデータを自由にダウンロードできるようにデザインを行った。また、巻末にはご協力いただいた行政・企業の方からのコメントも掲載した。右図は冊子の表紙デザインである。



## 4. 目的の達成状況、成果

### ①ワークショップの改善

日本デザイン学会等のフィードバックより、振り返り冊子のデザインを行った。これにより、ただ楽しく遊ぶだけではなく、行動変容につながるための橋渡しのデザインが完成し、本ワークショップデザインはいったん完成した。

### ②ワークショップの手順等をまとめた紙面デザイン

手順をまとめたワークショップは、10デザインである。この手順書をプリントアウト、ファイリングを行い、カラー印刷・ファイリングを行い、関係各所、大津市内の学童等に配布した。

### ③昨年度の取り組みの発展的成果

昨年度の取り組みで改善を行った「ワットランプ」が、2025年8月31日に、大阪・関西万博の滋賀の日ブース（滋賀県大学推進連携課こどもBASEブース）に出品した（写真）。その後、2年間の改善と万博での取り組みについて、2025年11月8日に日本デザイン学会学生プロポジションでポスター発表をした。



## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

学童等で気候変動や地球温暖化を学ぶ機会を提供する教材のデザインを行い、実際に児童に対してワークショップを実施する本取組を通じて、次世代を担う若者である大学生へのCO<sub>2</sub>ネットゼロの「見える化」、「自分ごと化」につながった。

また、今後も滋賀県地球温暖化防止活動推進センターとの連携も意識し、小学生等の児童に対して「見える化」「自分ごと化」が促進されるような教材制作・ワークショップ運営を行うことで、より多くの県民に「しがCO<sub>2</sub>ネットゼロムーブメント」の拡大につながるような取組を期待する。


## 6. 課題、懸案事項

①本来であれば、ワークショップの備品の現物をそのまま学童にご提供する形が理想的であるが、破損や所有権の問題から現実的ではないと判断した。学生がデザインしたものを、学童等で負担なく活用していただける方法は今後の懸案事項である。

②配布先を、ご協力いただいた学童等とさせていただいたが、その他の可能性についても検討すべき課題である。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 8

プロジェクト名（活動テーマ）： こども園児との日用品を応用した造形あそびワークショップ	
SDGs 目標：	
提案者	：成安造形大学 藤井俊治
自治体担当者	：本福寺こども園
連携大学担当者	：成安造形大学 田口真太郎

### 1. 取組体制

成安造形大学（実施主体）：学生スタッフ（8名）の招集、ワークショップの計画、実施、指導・監督を担当。学生は園児と直接交流し、造形遊びの指導とサポートを行う。

本福寺こども園（サポート）：プロジェクトの主要な対象として、年長園児100名が参加。第二本福寺こども園でのワークショップ会場の提供。

### 2. 背景・目的

本研究は、大津市の子ども・子育て支援施策に基づき、大津市堅田地域にある本福寺こども園における造形活動の不足を補うことを目的としています。令和7年度は、9月2日（火）に本福寺こども園本園の年長100名を対象に、本学の学生とともに紙コップを用いた造形遊びを実施。園児の心身の健全な発達を支援し、協調性と創造性を育むことを目指しました。また、本学の学生が園児と関わる過程で、多様な気づきを得ることも期待されます。

### 3. 活動内容

活動は三段階に分けて構成。第一段階では、園児が紙コップに親しむためのアイスブレイク的な活動をグループで行いました。第二段階では、グループごとに協力して紙コップタワーを制作し、より高く積み上げることに挑戦しました。第三段階では、参加者全員で紙コップを重ね合わせ、床いっぱい大きな円形の作品を制作しました。最後には、振り返りを行い、園児たちは自分の感想をグループ内で共有しました。



#### 4. 目的の達成状況、成果

ワークショップ実施後のアンケートによる成果の達成状況をまとめた。

<園児にとって>

##### 協働と挑戦の場

紙コップを積み上げる遊びを通じて、友達と協力しながら「どうすれば高くできるか」「壊れないようにするにはどうするか」を考え、失敗と成功を繰り返すことで、悔しさや達成感を体験し、協調性や粘り強さを育てていた。



##### 自由な発想の広がり

「楽器にしたい」「迷路を作りたい」など、遊びを発展させるアイデアが園児から自然に出てきており、創造性や主体性を高める活動になった。

##### 感情と自己表現の場

感想を共有することで、自分の体験を言葉にして人と分かち合う力が育まれた。

<学生にとって>

##### 教育的視点の獲得

園児と直接関わることで、指示や声かけの難しさ、子どもに合った表現や態度を学んだ。保育者の実践を観察することで教育現場での具体的な方法を体感的に理解する場になった。



##### 自己成長と創造的刺激

園児の豊かな発想や工夫から刺激を受け、自分自身の制作活動にも新たな視点を取り入れられるきっかけになった。

<こども園教員にとって>

##### 子どもの新しい姿の発見

普段の保育では見られない園児の表情や行動を目にするすることで、子どもの成長や可能性を再確認する機会となった。

##### 自らの学びと成長の場

大学生や園児と一緒に活動に参加する中で、自分自身も遊びの楽しさや教育的な気づきを得ており、「大人も真剣になれる場」として機能していた。



上記アンケートのまとめからこの活動は、子ども・学生・教員それぞれが立場を越えて学び合い、成長する「共創の場」だったと言える。年齢や役割を超え、「ともに考え、ともに作り、ともに育つ」時間が生まれた活動に寄与することができた。

また、昨年度作成したパンフレットを配布することで、家庭でも活動内容について理解を



深めてもらう機会をつくることができた。

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

紙コップを活用したワークショップでは、活動を3段階に分けることで、子どもたちが安心して素材に触れ、想像力を広げ、多様な楽しみ方を体験できるよう工夫されていました。さらに、活動後には振り返りの時間が設けられ、子どもたちが自身の経験を言葉で表現し、手応えを感じるとともに、友達の姿や良さに気付く機会、そして次への意欲を育む場となっていました。

本事業は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の「感性と表現」に関する領域に該当すると考えられます。「感性と表現」の領域では、『感じたことや考えたことを自分なりに表現することで、豊かな感性や表現力を育み、創造性を豊かにする』ことを目指しています。子どもたちにとって非常に有意義なものであったと深く感謝申し上げるとともに、プロジェクトの継続とさらなる発展を心より期待しております。

## 6. 課題、懸案事項

### □活動後の振り返り・鑑賞時間の充実

園児が自分の体験を深めるだけでなく、学生・教員にとっても教育的な学びの整理につながるため、感想を共有する時間をより丁寧に設ける必要がある。また、夏場は開催時期の検討も必要。

### □グループ間の達成度の差への対応

「全員が目標の高さを達成できる」ことをめざし、今年度は事前の作戦会議を導入したが、園児の主体性を尊重しながらも、達成感を共有できる進行方法のさらなる工夫が求められる。

### □新しい造形内容の導入・多様化

積み上げだけではなく、園児の意見を取り入れた「ちんあなご制作」などを導入したが、創造性をさらに広げるためには、紙コップを用いた音や動き、ゲーム性のある活動など、新しいプログラムの開発が課題である。

### □家庭や地域への活動波及

R6 年度に作成したガイドブックの配布により家庭での共有は進んだが、活動を一過性で終わらせず、家庭・地域での継続的な遊びや学びへつなげる仕組みづくりが今後の課題である。

### □学生の教育的視点の深化

学生は「子どもへの指示の難しさ」「保育者の声かけの工夫」などを学んだが、子どもの発想を教育的な意義としてどう捉え、大学での制作や研究にどう還元するかという視点はまだ十分に育っていない。振り返りの際にこれからの学生自身の学びを言語化するサポートが必要である。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 9

プロジェクト名（活動テーマ）：  東近江市 小学校体育元気アップ事業	
SDGs 目標：	 
提案者	：びわこ学院大学学長 沖田 行司
自治体担当者	：東近江市教育委員会教育研究所所長 栗田 一路
連携大学担当者	：深田 直宏

### 1. 取組体制

- ①東近江市教育研究所：本事業の広報及び連絡調整。
- ②びわこ学院大学：深田ゼミの学生を中心とする子ども学科の学生。  
小学校の体育活動に対する学生ボランティアの取り組み及び大学教員による体育活動に対する情報提供。

### 2. 背景・目的

小学校の先生は幅広い業務を抱えており、多忙な中で体育授業の計画準備を進めるのは容易ではない。加えて体育授業が苦手な先生が存在も指摘されている（中央教育審議会，2002）。そこで学生ボランティアによる体育活動に関わる支援及び大学教員による体育授業に関する情報提供を行い、体育活動の充実、学校現場の負担軽減、及び、学生の実践的能力の育成を図ることを目的とする。

### 3. 活動内容

本事業は、東近江市教育委員会（教育研究所）と連携し、市内小学校体育授業の充実・改善、及び体育的活動に関する支援を行っていく。具体的支援内容は以下の通りである。

- ①体育授業の充実・改善に関わる支援及び情報提供
- ②体育授業に関わる校内研修の設定
- ③体育的活動の充実・改善に関わる支援及び情報提供
- ④水泳授業の支援（学生ボランティアの派遣）
- ⑤運動会、マラソン大会等の支援（学生ボランティアの派遣）
- ⑥実技講習会の設定

### 4. 目的の達成状況、成果

本事業を東近江市教育研究所の広報に載せていただくことで、3つの小学校から依頼を受けた。

主な取り組み内容は以下の通りである。

- ・東近江市 M 小学校：運動会、校内陸上記録会、持久走大会の補助（写真 1, 2, 3, 4）
- ・東近江市 K 小学校：体育授業の準備片付け及び子どもの運動の補助（写真 5, 6, 7, 8）
- ・東近江市 N 小学校：学生による体育ゲストティーチャー（写真 9, 10, 11, 12, 13）

実際に関わった学校数としては 3 校であったが、小学校の先生方からは、「学生が補助に入ってくれたおかげで助かった」と感謝の言葉をいただいた。また、学生がゲストティーチャーとして活動した際には、担任の先生と子どもたちから学生に宛てて丁寧な感想をいただいた。

活動に取り組んだ学生は、以下のような感想を述べていた。

学校行事のボランティアでは、小学校の先生方の準備や打合せに参加させてもらうことで、全体の動きや先生方の役割や配置など、事前の準備と共通理解の大切さを理解することができた。先生方の仕事の補助をすることで、少しではあるが負担軽減に役立てたと感じている。子どもの指導に関わるゲストティーチャーとしての活動では、準備の大切さ、子どもの発達段階に合わせた活動の設定、子どもに対する簡潔な説明や指示の大切さを実感した。準備が大変なものもあったが、何より子どもたちの楽しそうな笑顔が一番の励みとなった。

上記の感想から、学生はこれらの活動を通して、「準備の重要性」、「教育現場の協働」、「子ども理解」、「指導技術」、「教育のやりがい」を実践的に学ぶことができたと思われる。

#### 【東近江市 M 小学校：校内陸上記録会の補助の様子】



写真 1 校内陸上記録会補助の参加学生



写真 2 ゴールで記録測定する学生



写真 3 ボール投げの計測



写真 4 小学生とリレー勝負

【東近江市K小学校：体育授業の補助の様子】



写真5 学生が馬になって



写真6 跳び箱の補助



写真7 跳び箱のアドバイスも



写真8 片付けも一緒に

【東近江市N小学校：学生によるゲストティーチャーの様子】



写真9 先生役として子どもの前に立つ学生

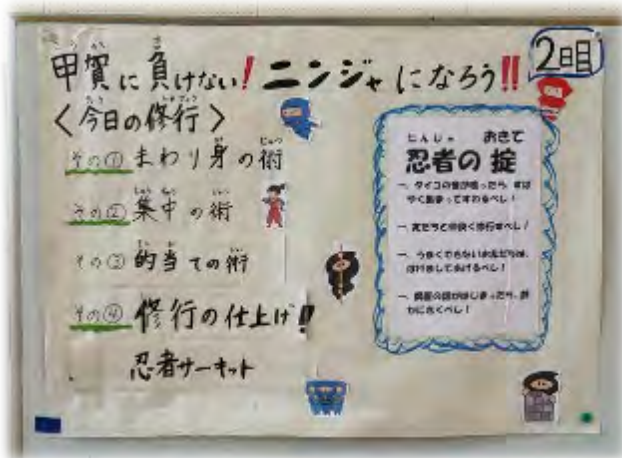


写真10 本日のメニュー



写真11 マットで転がろう



写真12 ボールを打てるかな



写真13 手作りけん玉に挑戦

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント




体育の授業は活動が多く、苦手な児童もいる。「学生が補助に入ってくれたおかげで助かった」という言葉は、児童一人一人に目を配りたいという小学校教員の本音に基づいたものと考えられる。教員がより広い視野で児童をとらえると同時に、児童にとっても複数の目があることで安心して学習に向かうことができた。学生の事情もあると思うが、学校現場の事情も十分踏まえていただき、事業を推進していただきたい。

## 6. 課題、懸案事項

本事業は、学生にとっても実践的な学びとして意義があると思われる。しかし、学生にとっては大学の授業が優先である。加えて、教員採用試験の3年時受験が可能となったため、ゼミ生の多くは、授業の課題と採用試験の勉強に取り組む中での活動となり、時間の調整が難しい面があった。そのため採用試験前の春学期の取り組みをセーブしなければならなかった。今後は見通しを持ち学生が役割を分担するなどして大学の授業との両立を図っていくことが大切である。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1年目）

No. 10

プロジェクト名（活動テーマ）： 余呉の森の価値を生むエコシステム ～持続的に学ぶことが可能な森の好循環～	
SDGs 目標：	  
提案者	：奈良 篤樹
自治体担当者	：岡田 健郁
連携大学担当者	：大同 一誠

### 1. 取組体制

長浜バイオ大学・オルガネラ構造機能研究室：活動の統括と運営の全てを担当。

余呉小中学校：6年生が試料散策と電子顕微鏡観察（大学にて実施）、読み札作成（小中学校にて実施）の取組に参画。

自治体：なごはま森林マッチングセンターや長浜市地域おこし協力隊との協力で、余呉の森林散策ルート作成や提案する森林課題の設定をする。

### 2. 背景・目的

人口減少の問題を抱える余呉は、琵琶湖へと注ぐ川を生む森を有しており、生態系保全の鍵となる。本取組では、小学生が探索した森の資源を走査型電子顕微鏡で撮影する。得られた写真を見て俳句を詠んだり、電子顕微鏡仮想空間に入ったりすることで、全く新しい森の魅力や価値を小学生が体験するシステムを構築する。

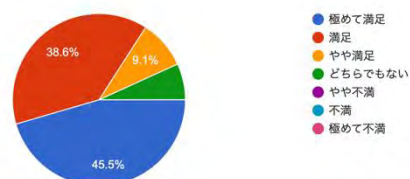
### 3. 活動内容

SDGs Aichi EXPO への出展・参加による、電子顕微鏡と俳句の実践の発信(10/5-8 実施, 愛知県常滑市)

[活動内容] これまで行ってきた電子顕微鏡と俳句の、余呉小中学校の6年生との取り組みを内外に発信することを目的に、SDGs Aichi EXPO への出展・参加を行った。出展内容の満足度は非常に高く、アンケート回答者のアンケート回答者の93.2%が本出展ブース内容に満足していた。本年度は、森で小学生と行っているSDGsの取り組み等を漫画で伝える展示を新たに試みており、興味を持ってくれた回答



本ブースの満足度を教えてください（一つだけチェックして！）  
44件の回答



も全体の 25%を占めた。

### 余呉の自然を利用した電子顕微鏡観察と俳句の作成

[活動内容] 余呉小中学校の 6 年生を対象に、本学設置の走査型電子顕微鏡(日立 S-3400N)の操作体験を行った。

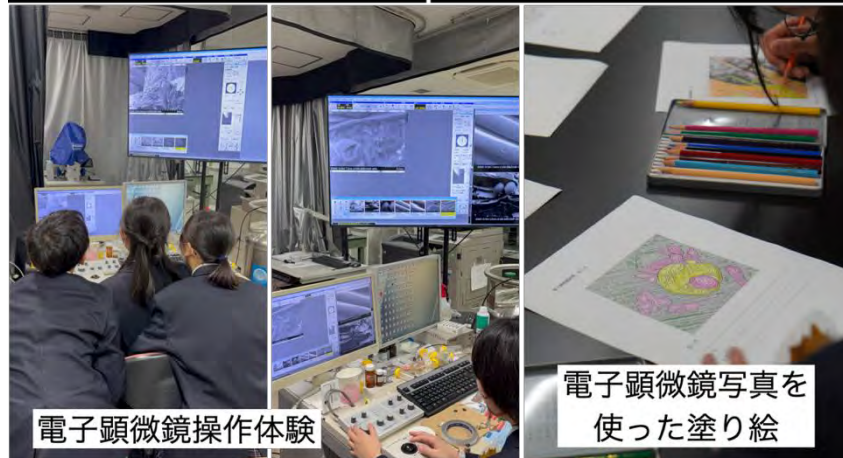
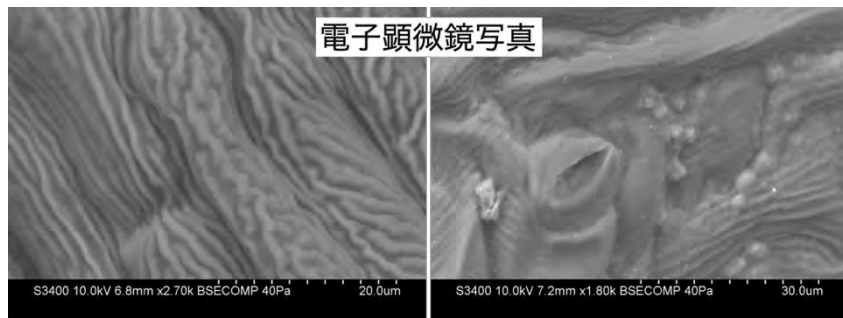
(試料のサンプリング[11/10 実施]) 森林について理解を深めるために、余呉小中学校内で生徒と歩いて落ちているものを拾い、電子顕微鏡観察サンプルとした。当初、小中学校の裏山で散策を行う予定であったが、天候不順であったことと、熊の出没の可能性もあり、市と協議し変更した。長浜地域おこし協力隊との連携で、様々な森のものをサンプリングでき、学びが多かったと考える。



### (電子顕微鏡観察

[11/18 実施])

生徒が拾った森のサンプルのミクロの世界を体験するため、走査型電子顕微鏡を用いた観察を行った。走査型電子顕微鏡を生徒自身が操作をし、写真を得ることができた。生徒には事前学習として電子顕微鏡にまつわる基礎知識となるプリントを配布し、電子顕微鏡がどのような機器であるのかを学



ぶ機会を与えた。電子顕微鏡写真は白黒なので、得られた電子顕微鏡写真に色をつける体験もすることで、自由なイメージを育むことを目指した。

(電子顕微鏡写真を用いた俳句の作成[11/26 実施]) 電子顕微鏡アートは私たちに何を想像させるのか? 私たちは、アートの言語化を目的に、得られた電子顕微鏡写真を絵札とし、かるたの読み札を俳句で作る授業を行った。数種類ある電子顕微鏡写真シールの中から1枚選び、夏の季語をテーマに俳句作りをした。その後かるた台紙にシールを貼り、俳句の清書を行った。



生徒の作句発表といいね

電子顕微鏡アートの選択

生徒の作句

(電子顕微鏡アートを使った俳句から始まる未来の森の考案[1/20 実施]) 生徒が詠んだ俳句は、未来にどう影響するのか? 昆虫の卵の表面の電子顕微鏡アートを生徒が詠んだ俳句「いちご狩り金はらってもととるぞ」をベースに、2035年のいちご狩りを考え、そのインタビュー



VR体験

VR画像

生徒の発表

意見出し

VR体験

缶バッジ

記事を作る取り組みを行った。まず、森で拾ったサンプルが俳句になるまでのVRを体験することで、振り返りを行った。また、生徒が観察した画像が缶バッジとして手にできることの体験も行った。これら2つの体験から、10年後を想像してもらい、付箋にさまざまな森に関する取り組みや関わりについて書き出した。考えたインタビュー記事をグループごとに発表してもらった。

#### 4. 目的の達成状況、成果

本取組の目的は、全く新しい森の魅力や価値を小学生が体験するシステムを構築し、森の将来を考える土台とすることである。そのテストモデルとして今回、森でサンプルを拾い(11/10)、そのサンプルのミクロの世界を電子顕微鏡で観察し(11/18)、観察した電子顕微鏡写真アートを使った俳句を読むことで言語化し(11/26)、生徒が詠んだ俳句から未来の森を考える(1/20)ことを行った。これら取り組みによって、「森-電子顕微鏡-俳句-森」といった循環システムを構築でき、実行できた。特に、「俳句-森」については、新規の取り組みであり、1/21 中日新聞滋賀県版に掲載され、大きな成果を得ることができた。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

本取組を通じて子どもたちが森林の新たな魅力・価値を発見し、将来について考えるきっかけが生まれた。

また広報活動や新聞掲載を通じて、取組の内容や余呉地域の魅力を内外に発信することができたと考える。

引き続き、来年度以降も継続して取組を行われ、森林にかかわる次世代の育成、地域資源の持続的な循環システムにつながることを期待する。




#### 6. 課題、懸案事項

**課題1（理系人材もしくは文理融合人材育成に向けての定量的効果測定方法の構築）** 本取り組みは、電子顕微鏡を用いた理科系人材のみならず、得られた画像に俳句を付加するといった、文理融合教育を目指している。昨今、文理融合の教育の必要性が言われているが、その教育方法や効果測定方法など、課題は多い。本取り組みによって、電子顕微鏡を用いた教育方法が確立しつつある。一方で、本教育方法が効果的であるかどうかの測定はアンケート以外に存在しない。有効な効果測定の方法を考える必要がある。

**課題2（VR からメタバースへの移行）** 今回の取り組みによって、生徒が採取した森に、電子顕微鏡アートが出現し、合わせて詠んだ俳句が刻印される VR を作成できたことは貴重な一歩である。10年後を見据えた更なる高次の仮想空間を構築するために、VR からメタバースへの移行は必須であるが、まだ進んでいない。次年度以降の課題である。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 11

プロジェクト名（活動テーマ）： ♻️ サイがまた来た Re ♻️ サイ来る ～ごみから資源へ 彦根発！循環型社会への挑戦～	
SDGs 目標：   	
提案者	: 彦根市
自治体担当者	: 巖佐 文衛、宮腰 峻輔
連携大学担当者	: 滋賀県立大学 生活デザイン学科 准教授 山田 歩

### 1. 取組体制

- ・彦根市 清掃センター
- ・滋賀県立大学生活デザイン学科  
→行政が活動中核となり、大学(学生、教員)と共同して取り組みを企画・運営し、学生が主体となって、啓発活動や情報発信を実施。

### 2. 背景・目的

彦根市におけるごみのリサイクル率は年々低下しており、令和 4 年度で 12.6% となっており、その改善に向けた連携を図りたい。

### 3. 活動内容

#### <現地視察>

どのようなごみが分別されず排出されているのか、また、市民に意識変化や行動変容を促すのにどのような啓発や介入が効果的なのかを検討するため、滋賀県立大学学生 5 名および担当教員が彦根市のごみ処理場の視察を行った（2025 年 6 月 24 日）。

#### <アンケート調査>

学生のごみ分別に関する意識と行動の実態を把握するため、滋賀県立大学の学生 194 名（そのうち彦根市在住学生は 112 名）を対象に、アンケート調査を実施した（2025 年 7 月 15 日）。

#### <意見交流会>

上記アンケート調査の結果を自治体と大学で共有した（2025 年 11 月 11 日）。これらのデータについて行動経済学的な観点から課題の整理をおこなうとともに、解決すべき課題の優先順位について議論を交わした。また、学生による具体的な啓発案や介入案の提案が行われた。今後、どのようなかたちでごみ分別に関する啓発と介入を進めるのか検討が行わ

れた。

### ＜社会実験＞

現地調査とアンケート調査で得られた知見を前提に、行動経済学のナッジ理論の観点から、ゴミ分別を促す啓発ポスターを制作し、実際に市民の行動変容を引き起こすことができるのか、効果検証を行った。ターゲットは、主に学生が下宿する彦根市の集合住宅である。排出されたプラスチックごみに含まれる「汚れたトレー」「ペットボトル」「その他混入物」の有無について組成調査をポスター掲示前後で行い、効果を検証した。

## 4. 目的の達成状況、成果

### ＜アンケート調査＞

学生を対象としたアンケート調査からは、「分別を心がけている」と自ら回答する学生であっても、容器包装プラスチックやペットボトルを行政が指定するかたちで分別できていないことが確認された（図1）。本人は正しく分別しているつもりであるが、誤った知識に基づいて分別を行ってしまっていることが示唆された（知識の欠如）。また、正しく分別されなかったごみが行政によってどのように処理されているのかについても十分な理解がされていないことが確認された（図2）。こうした理解不足が、分別ルールを順守しようという個々人の責任感を希薄化させてしまっている可能性が浮かび上がった（モチベーション・感情の欠如）。

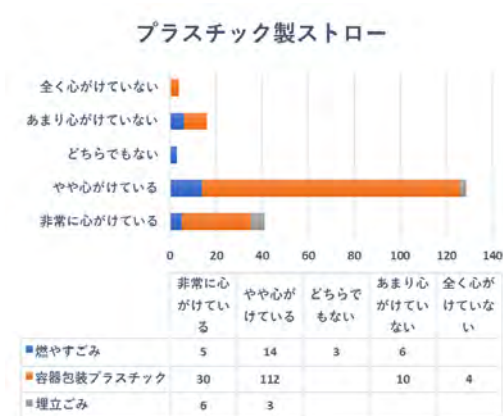


図1 アンケート結果例：誤った分別知識



図2 アンケート結果例：不正確な理解

### ＜社会実験＞

**概要** 現地調査およびアンケート調査の分析を踏まえ、「知識欠如」と「モチベーション・感情の欠如」のそれぞれにアプローチするポスターを用いて、住民の行動変容を促す社会実験を計画した。介入の対象となる行動は、「(誤って) プラごみにペットボトルを捨てる行為」と「(誤って) プラごみに汚れプラごみに捨てる行為」に定めた。行動経済学の知見からは、単純に正しい知識を提供するなどして「理性」に訴えるよりも、「感情」に訴えるコミュニケーションが行動変容に有効であることが知られている。効果的に「人を動かす」働きかけを体系化したナッジ理論の一つである「EASTフレームワーク」にのっとり、行動変容が見込めるポスターを作成した。

ポスター ポスターは、1) キャラクター化されたペットボトルやプラごみが涙目でプラごみの正しい分別を訴えるもの(図3, 図4)、2) プラごみの誤ったごみ捨てをニュース番組における速報のように面白おかしく紹介するもの(図5, 図6)の2種類を作成した。それぞれ、ボディコピーとメインビジュアルで注意をひきつけ、感情に訴えることを狙い、ポスター下部には正しい分別の知識を記した。



図3 ペットボトル分別ポスター(涙目 ver)



図4 汚れプラ分別ポスター(涙目 ver)



図5 ペットボトル分別ポスター(ニュース ver)



図6 汚れプラ分別ポスター(ニュース ver)

手順 彦根市の6物件から協力を得た。集合住宅A(総戸数20)と集合住宅B(同14)は「涙目」ポスターをごみ集積場に設置した。集合住宅C(同24)と集合住宅D(同10)は「ニュー

ス」ポスターを設置した。比較対象である、集合住宅 D（同 8）と集合住宅 F（同 32）にはポスターは設置しなかった。まず、2月第1週の「プラごみの日」に上記6物件のごみ集積場で出されたごみ袋を回収した。その後、同日に、物件 A から D についてはごみ集積場にポスターを掲出した。E と F はポスターは掲出しなかった。次に、2月第3週の「プラごみの日」に上記6物件のごみ集積場で出されたごみ袋を回収した。回収されたごみ袋の内容物について組成調査をおこなった。

**結果** 組成調査の結果を表 1 に示す。プラごみへのペットボトルの混入率は、1)「涙目」条件で介入前 70 パーセントから介入後 42 パーセント、2)「ニュース」条件で介入前 60 パーセントから介入後 46 パーセントとなり、大きな減少が見られた。一方、汚れプラごみの混入率については、1)「涙目」条件で介入前 30 パーセントから介入後 42 パーセント、2)「ニュース」条件で介入前 70 パーセントから介入後 54 パーセントとなり、結果が分かれた。ポスター掲出をしなかった物件では、回収できたごみ袋が極端に少なく（1回目2袋、2回目7袋）、数値を比較すること自体ができなかった。全体的には、ポスター掲出による行動変容が確認できたと言えるが、十分なごみ袋が回収できなかったことに加え、回収したごみ袋にはポスター掲出前からのごみも含まれていたりするなど、ポスター掲出の効果を純粋に検証できていなかった可能性があり、今後の改善事項として残された。

表 1 組成調査の結果（数値はごみ袋の個数）

	涙目		ニュース		統制	
	正分別	誤分別	正分別	誤分別	正分別	誤分別
<b>ペットボトル</b>						
ポスター掲出前	6	14	4	6	2	0
ポスター掲出後	7	5	7	6	5	2
<b>汚れプラゴミ</b>						
ポスター掲出前	14	6	3	7	0	2
ポスター掲出後	7	5	6	7	1	6

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント


今回は初めての試みにもかかわらず、県立大学のご協力のもと大学生へのアンケート調査および集合住宅へのポスター掲示による適正なごみ分別の効果について検証を実施しました。容器包装プラスチックごみは、燃やせるごみに比べ排出量が少なく、そのような状況下での実証実験ではありましたが、一定の効果が表れたものと考えられます。排出者に文字だけで啓発するのではなく、絵、写真で訴えた視覚的演出による効果と考えられます。

## 6. 課題、懸案事項

今回の社会実験では一定の成果が得られたが、回収ごみ袋数が十分でなかったり、最適なタイミングで組成調査できなかったり、いくつかの課題が残された。これらの課題をふまえ、実証方法に改善を加えることで、ごみ分別の介入効果と行動変容のリアルをより正確に把握できるようになり、ごみ分別を促すよりよい取組みが可能になると考えている。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 12

プロジェクト名（活動テーマ）：	
びわこいきいきプロジェクト ～フレイル予防と社会的つながりを目指して～	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこリハビリテーション専門職大学 作業療法学科 講師 木岡 和実
自治体担当者	：東近江市福祉部長寿福祉課 参事 脇 美早子
連携大学担当者	：びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター センター長 代理 岩崎 康司

### 1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学作業療法学科の教員および学生、東近江市長寿福祉課と共同で行う。

#### 【びわこリハビリテーション専門職大学の役割】

- ・住民の生活評価と課題解決に向けた取り組み
- ・作業療法学科学生及び教員によるミニレクチャーや作業活動の企画運営
- ・活動の広報、発表

#### 【東近江市長寿福祉課の役割】

- ・地域課題に関する情報提供
- ・住民の生活評価への直接的関与
- ・課題解決に向けた助言と実践

### 2. 背景・目的

東近江市の高齢化率は、2025 年時点で約 27.7%となっており、人口の 3.7 人に 1 人が 65 歳以上という状況である。さらに本学が位置する愛東地区を含む農村・中山間地域では、町別・集落別で高齢化率が 30%を超えると多く、その進行も早いとされている。このような地区では産業の衰退や交通事情の不便なども相まって、主体的で活動的な生活を送る高齢者の減少が避けられない現状があり、高齢者の社会的フレイルは、孤独や閉じこもりを誘発し、心身の機能低下を招くという悪循環に陥る。

本事業では、大学で行う作業活動の場を通いの場とし、地域のネットワークの再構築や孤立の防止を目指すとともに、参加者の生活の質の向上を目的とした取り組みを行う。

### 3. 活動内容

【対象】令和6年度「高齢者健診」・「地域サロン等」で用いた質問票から健康や生活になんらかの不安があるとされた方の中から、応募のあった18名

【活動場所】びわこリハビリテーション専門職大学

【活動実施日】①8/30 ②9/27 ③11/29 ④12/20 ⑤2/28 ⑥3/28

各開催日の前後には学生を中心とした企画会議や反省会、またアンケートや評価結果の分析・検討などを実施。

#### 【内容】

本企画は参加者同士が地域の中で顔の知れた関係として過ごせることや、作業活動による成果物を共有し、達成感や満足感を感じ日常生活に繁華させること、大学を通いの場として学生との交流を図りつつ、認知症予防や機能維持・社会参加に取り組むことを目的としている。各開催日には、学生による認知症予防のレクリエーションと、革細工・タイルモザイクなどの作業活動を実施している。参加者は意欲的な方が多く、2回目以降には次回の開催日を楽しみにしながら日々を過ごしているとお声をいただいている。その他、実施日ごとに感想を伺っている中には、「友達に会えてうれしかった」「頭も身体も動かせて良かった」「大好きな作業で気分が高まりました」などの感想をいただき、参加者にとって有意義の時間が提供できていると考える。



#### 4. 目的の達成状況、成果

作業療法の視点から地域貢献活動を目指す本学の取り組みでは、2年間の活動を通して、高齢者の社会的フレイルの改善、心身機能の維持、地域での交流機会の増加、社会参加の促進、顔の見える関係づくりによる見守り機能の強化など、さまざまな成果が期待される。今年度の活動開始時には、WHOQOL-OLD を用いて参加者の生活の質（QOL）を評価した。WHOQOL-OLD は、WHO が開発した高齢者向けの QOL 評価尺度であり、身体的健康に加え、生活への満足感や自立、社会参加、人との関係性、死に対する不安など、高齢期特有の心理・社会的側面を総合的に評価するものである。

その結果、複数の項目で基準値を下回る対象者が認められ、特に「威厳」（66%）および「死と死に行くこと」（60%）では過半数が基準値未満であった。また、「過去・現在・未来の活動」「社会参加」「他者との親密さ」では約 3 割が基準値を下回り、総合得点でも 46%が基準値未満であった。

以上より、回答者 15 名のうち約半数が何らかの QOL 低下を感じていることが明らかとなり、当該地区での潜在的な課題の存在が示唆された。これらの要素は相互に関連しており、社会参加や他者交流の不足は、生きがいや役割の喪失、不安や孤独感の増大につながり、結果としてフレイルの進行を招く可能性がある。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

今回の事業参加者は、高齢者の質問票（フレイルチェック）の回答を基に、健康観や生活の満足度が低く、認知機能の低下や社会参加の減少傾向等の自覚ある高齢者を対象者としたため、加齢に伴う心身状況に対して何らかの喪失感を感じている人が多かったのではないかと思います。この取組における活動は、今までの社会経験が活かされた作業活動を設定しており、社会参加することへの満足感・達成感が得られ、個人の自信の回復につながると考えています。

活動の中では、認知機能を刺激するような内容も盛り込まれていますが、参加者の尊厳が保たれるように、学生とのやりとりを楽しみながら課題を考える時間になるよう工夫されています。

次年度は、さらなる社会参加促進のための動機付けや環境整備ができるように、この事業を通して提案できればと考えています。


#### 6. 課題、懸案事項

次年度に向けては、単に交流の場を提供するだけでなく、提供する作業内容にも着目し、参加者が役割を感じられる活動を設定することが課題である。また、活動を通して参加者それぞれの日常生活が前向きになるような関わりが求められる。

さらに、継続的に WHOQOL-OLD を実施することで QOL の変化を把握し、数値の変化だけでなく、参加者の気持ちや意欲の変化にも目を向けていく必要がある。これらの取り組みを通して、参加者が主体的に生活を送れるよう支援していくことが重要であると考えている。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 13

<p>プロジェクト名（活動テーマ）： 親子で楽しむリズムトレーニング～子ども達の運動能力向上を目指して～ 〔SDGs 目標番号： 3 〕</p>	
<p>SDGs 目標：</p>	
<p>提案者</p>	<p>組織・団体名：びわこリハビリテーション専門職大学リハビリテーション学部 理学療法学科 代表者の役職・氏名：教授 宇於崎孝、講師 野口真一、准教授 大西 均、 准教授 安田 孝志、准教授 藤谷 亮 住所：東近江市北坂町 967</p>
<p>自治体担当者</p>	<p>：東近江市文化スポーツ部スポーツ課 主任 北川 史也、主事 佐々木星貴</p>
<p>連携大学担当者</p>	<p>：大学・所属：びわこリハビリテーション専門職大学事務センター 役職・氏名：センター長代理 岩崎 康司</p>

### 1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

- ・運動能力測定、リズムトレーニング指導：理学療法学科教員及び学生
- ・教室の広報および運営、保護者への連絡：事務センター職員

東近江市スポーツ課の役割

- ・教室への助言および指導
- ・教室の運営と安全管理指導
- ・広報

### 2. 背景・目的

令和 5 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果、滋賀県の小学生男女とも全国平均より低い結果を示しており、運動能力が低下している。また、「体育の学習が楽しい」「運動が好き」の割合も、小学生では全国よりも低い結果となっている。

本事業では、子ども達が最新のポップな音楽に合わせて、楽しくジャンプするリズムトレーニング教室を開き、健康な発育を促すことと、親子で楽しく健康を考える機会を作ることとを目的とする。

### 3. 活動内容

令和 7 年度

9 月 7 日（日）リズムトレーニングの説明と効果についての講義、運動能力測定、リズムトレーニングの基礎的ステップ指導

- 10月5日（日）リズムトレーニングの基礎的ステップの復習、基礎的ステップ2の指導  
 11月2日（日）リズムトレーニングの基礎的ステップ2の復習、基礎的ステップ3と応用ステップの指導  
 12月14日（日）運動能力測定、これまでのリズムトレーニングの内容をすべて実施し自宅でも継続できる運動指導、9月と12月での運動能力測定結果の変化について説明



（リズムトレーニング教室の様子）

9月の運動能力測定には、「握力」、「10m走」、「垂直飛び」、「反応速度」、「反復横跳び」の5項目の測定を行った。測定は、教員と学生が5項目とも一緒に計測を行った。リズムトレーニングの指導の前後にはウォーミングアップとクーリングダウンも行い、すべて学生が全員で指導を行った。

10月、11月はリズムトレーニングの基礎から応用までを反復して練習を行った。それぞれの回が終了したのちに、その回で指導したステップを撮影した動画を参加者の方に送り、次の回まで自宅で練習を行ってもらうように指示している。

12月の4回目で9月に行った運動能力測定項目と同じ内容を測定し、3カ月での変化を返却した。また、すべての運動を通して行い、今後も自宅で継続できるように指導したことに加えて、動画も編集しすべての動画をまとめて練習できるようにして送った。

#### 4. 目的の達成状況、成果

参加対象は東近江市内に在住する小学生として募集したが、応募定員30名に対して20名の応募にとどまった。実際の参加者は、第1回が子ども20名（保護者20名）、第2回が子ども8名（保護者8名）、第3回が子ども12名（保護者10名）、第4回が子ども9名（保護者7名）であった。募集人数に対して参加者が当初より少なく、参加者としては目標に及ばなかった。しかし、子どもたちから「毎日練習している」「楽しい」「習い事にしたい」といった前向きな声が多く聞かれた。第4回終了後は、また来年も来たいという声もあった。

運動能力測定の結果については、9月と12月の両方で運動能力を測定できた9名の平均値を以下に示す。

握力：リズムトレーニング前 11,5kg → リズムトレーニング後 13,4kg

10m走：リズムトレーニング前 2.41秒 → リズムトレーニング後 2.45秒

垂直飛びリズムトレーニング前 29.4cm → リズムトレーニング後 32.1cm

反応速度：リズムトレーニング前 0.395秒 → リズムトレーニング後 0.370秒

反復横跳び：リズムトレーニング前 32.5 回 → リズムトレーニング後 34.4 回

このうち、下線の握力および垂直飛びにおいて、リズムトレーニング前後で比較して、有意に増加した。垂直飛びが増加したことは、下肢の最大筋力の増大および腱・筋の弾性エネルギー利用効率が向上したことを示す。また、握力が増大したことは、リズムトレーニングは全身運動であることから、体幹が安定することで遠位筋の筋力発揮ができるようになった結果であるといえる。そのほかの項目は前後で差が認められなかった。このことから、今回行ったリズムトレーニング課題では、瞬発力より下肢体幹筋力の増大した。

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

- ・子供や保護者の方が楽しく運動していたこと、親子で一緒に取り組めることで交流や会話が増えるのではないかと
- ・運動が苦手な子どもも。自分の好きな音楽に合わせて体を動かすことで運動が好きになる
- ・今後は各地域での活動にも取り入れてみては などといった感想やご意見を書いてください。

本事業では、子供たちが音楽に合わせて楽しみながら体を動かす姿が多く見られ、運動に対する前向きな意識づくりにつながったと感じています。特に、親子で一緒に取り組むことで、家庭内での会話や交流が生まれ、運動を身近に感じる良い機会になったのではないかと思います。

また、運動が苦手な子供にとっても、自分の好きな音楽に合わせて体を動かすリズムトレーニングは、運動への抵抗感を和らげ、「楽しい」「またやりたい」という意欲につながる有効な取り組みであると感じました。運動能力測定の結果からも、一部の項目において向上が見られ、短期間であっても一定の効果が確認できたことは、本事業の成果の一つであると考えます。

今後は、学校や地域団体等とも連携しながら、各地域での活動や通いの場などにも展開することで、より多くの子どもや家庭に運動の楽しさを広げていくことを期待しています

## 6. 課題、懸案事項


参加者が 20 名と少なかったことや、回によっては参加者減少したことがあった。これは、広報時期が遅かったことに加えて、広報の媒体が少なかったことが上げられる。また、子どもたちの学校行事と重なったこともあり、次年度は開催日時を検討する必要がある。

リズムトレーニングは音楽にあわせて楽しく運動ができる反面、今回参加者の多くが低学年であったこともあり、「難しくてできない」「疲れた」といった声もあったことから難易度の設定や疲労を考慮した時間配分を検討する必要がある。

教室開催後は自宅で練習ができるように動画を配信したが、復習動画の閲覧回数が 32 回、20 回、21 回と回を追うごとにやや減少しており、十分に復習が行われていないことがうかがえた。今後は、できる限り自宅でも取り組んでもらえるような教材の作成や工夫が必要だと感じた。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 14

プロジェクト名（活動テーマ）： いきいき生活プロジェクト 2025 —笑顔でのばす健康寿命—	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこリハビリテーション専門職大学 理学療法学科 准教授 池谷雅江
自治体担当者	：東近江市健康推進課(保健センター) 係長 中野 由美子
連携大学担当者	：びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター センター長代理 岩崎 康司

### 1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

- ・ 講座の講師、体力測定、体操指導及び運営：理学療法学科教員及び学生
- ・ 講座の広報

東近江市健康推進課の役割

- ・ 講座の講師、助言指導
- ・ 受講対象者の抽出、案内送付

### 2. 背景・目的

滋賀県の高齢化率は、2040年に37%にまで達すると推測されている。本事業では、加齢による運動機能や認知機能が低下するフレイルを予防し、住み慣れた地域での生活を継続できるよう、健康関連のセミナーや体操を通じて、健康寿命の延伸を目指す。「びわこいきいき体操」を指導することで、セルフトレーニングも推奨し「自分で管理する」ことの啓発につなげる。

### 3. 活動内容

フレイル予防のためには、転倒予防につながる運動機能の維持・改善だけでなく、睡眠、栄養、活動量の管理も重要となる。今回はシルバー人材センターに登録している高齢者の参加を募り、体力テストと基本チェックリスト、睡眠、栄養、活動量の調査を行い、筋力・バランス能力の維持・改善のための「びわこいきいき体操」指導に加えて、栄養指導や口腔内の健康などの講演を行うことで、活動性のさらなる向上を目指した。睡眠、活動量については測定機器利用の希望者に対し、個別にフィードバックを行った。

上記の目標を達成するため、令和7年度は6回の事業を実施した。各回の実施内容は以下のとおりである。

- 第1回 令和7年6月28日 体力測定、睡眠・栄養・活動量アンケート①（参加者34名）
- 第2回 令和7年7月26日 結果報告①とミニ講座（参加者29名）
- 第3回 令和7年9月27日 アンケート結果返しと講義（参加者21名）

第4回 令和7年11月1日 体力測定、睡眠・栄養・活動アンケート②（参加者25名）

第5回 令和7年12月6日 結果報告②とミニ講座（参加者17名）

第6回 令和8年2月7日 アンケート結果返しと講義（参加者25名）

#### 4. 目的の達成状況、成果

令和7年度に実施した2回の体力測定の結果の平均を下の表に示す。

	R7年6月（男/女 平均年齢）	R7年11月（男/女 平均年齢）
測定項目	男性17名 73.2歳/ 女性16名 72.3歳	男性15名、73.5歳/ 女性10名 72.9歳
① 握力 (kg)	32.0 (男 37.8/女 25.5)	32.5 (男 37.8/女 24.4)
② TUG (秒)	5.90 (男 5.64/女 6.13)	5.50 (男 5.49/女 5.60)
③ 2ステップ	1.33 (男 1.36/女 1.30)	1.39 (男 1.39/女 1.36)
④ 4スクエアステップ (秒)	7.3 (男 7.1/女 7.4)	7.2 (男 7.4/女 6.8)
⑤ 10m 歩行 (m/秒)	1.43 (男 1.43/女 1.43)	1.65 (男 1.61/女 1/7)
⑥ 30秒椅子立ち上がり テスト (回)	21.7 (男 22.8/女 20.3)	21.0 (男 21.5/女 20.3)
⑦ 片脚立位 (秒)	48.6 (男/51.9 女 44.8)	43.61 (男 43.5/女 43.8)

(1) 各測定項目の結果について

① 握力：全国平均とほぼ変わらない結果であった。

##### 握力の年代別平均値

年齢	男子 (kg)	女子 (kg)
20~24歳	46.33	27.79
25~29歳	46.89	28.27
30~34歳	47.03	28.77
35~39歳	47.16	29.34
40~44歳	46.95	29.35
45~49歳	46.51	29.31
50~54歳	45.68	28.17
55~59歳	44.69	27.41
60~64歳	42.85	26.31
65~69歳	39.98	25.20
70~74歳	37.36	23.82
75~79歳	35.07	22.49

② タイムドアップアンドゴー (TUG)

6月と11月を比較すると、男女とも速くなっていた。70歳代のカットオフ値は8.54 ± 0.17秒であり、この値よりもかなり速いタイムであった。

③ 2ステップテスト

「2歩幅 (cm) ÷ 身長 (cm) = 2ステップ値」で表されており、数値が大きい方が転倒リスクが低いと言える。男性はやや低め、女性はほぼ平均的な値であった。

##### 2ステップテスト値の世代別平均値

	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79
男性	1.64~ 1.73	1.61~ 1.68	1.54~ 1.62	1.56~ 1.61	1.53~ 1.58	1.42~ 1.52
女性	1.56~ 1.68	1.51~ 1.58	1.49~ 1.57	1.48~ 1.55	1.45~ 1.52	1.36~ 1.48

④ 4スクエアステップ

床に十字形に置いた障害物を、前後・左右にまたいで素早くステップする能力を測る動的バランスのテスト。15秒以下であれば、転倒リスクは少ないと言われている。今回は15秒以上かかっている参加者はおられなかった。

⑤ 10m歩行

10mの距離を、通常歩いている速度で評価。男女とも、6月と11月の比較では、歩行速度が速くなっていた。夏は事業を行わなかったが、5か月の間に顕著な身体機能の低下がなかったことが伺えた。

⑥ 30秒椅子立ち上がりテスト

30秒間で椅子から素早く何回立ち座りができるかを測定する、簡便な運動機能のテスト。下肢筋力や転倒リスクの評価としても用いられる。

男女とも2回の測定でほぼ変わらない結果であった。

⑦ 片脚立位

片脚立位の姿勢を長く保持できるほど歩行中に転倒しにくいと報告されている。運動器不安定症と診断される基準は15秒以下であり、複数の参加者がこれに該当した。一方で測定最大値の120秒が可能であった参加者も複数存在した。

(体力測定の様子：一部抜粋)



TUG



2ステップテスト



4スクエアステップ

[体組成測定 (筋の質)]

TANITAの体組成計を用いて、筋の質を位相角(°)で測定した。参加者全体の平均値は $5.2 \pm 0.7^\circ$ で、日本人のほぼ平均的な値であった。筋の質が良いほど数値が高く、全身筋力を反映する握力、総合的な歩行・バランス能力の評価であるTUG、下肢筋力を反映する30秒椅子立ち上がりテストの結果と有意な相関があった。

[栄養について]

Mini nutrition assessment short-form(MNA-SF)を用いた。12-14点：栄養状態良好、8-11点：低栄養のおそれあり、0-7点：低栄養、と評価される。参加者全体の6月の平均は11.8点、11月は11.2点であった。9-11点が6月10名、11月15名いたが(アンケートのみ回答、体力測定未実施者含む)、体力測定結果は平均を下回るテストもあったが、ほとんどが平均か、やや良い者が多かった。

[睡眠について]

4名の希望者に対して眠りSCANを用い、1週間の睡眠の質と時間を評価し、各個人に結果表

を作成してフィードバックした。高齢者は中途覚醒の回数を気にする傾向にあるが、加齢により睡眠時間が短くなるのは当然であること、「睡眠の“時間”ではなく睡眠の“質”が重要」であるとの理解を促した。

4名の体力測定結果は、各性別の平均～やや良い結果であった。人数が少ないため、睡眠の質と体力測定結果とを関連付けるにはデータが不十分であった。

今年度、夏の暑い時期を避けて6回事業を行った。その中で、6月と11月に体力測定を実施した。全国平均や各測定項目のカットオフ値と比較すると、集団全体としては2回ともおよそ平均的な結果であった。6月と11月の比較では、夏は外出を控えて活動量が低下する可能性を考えたが、顕著に低下した項目はなかった。

これらの結果は、参加者がシルバー人材センター登録者であり、定期的に仕事を行っていることで活動量が維持できているためと考えられた。

今年度、講義、体操指導、体力測定を行ったことで、体力の弱いところが理解できた、健康維持を意識するようになった、散歩を始めた、など前向きな意見が多く得られた。次年度は、より活動量の維持と筋力向上につながるよう、「びわこいきいき体操」の指導や運動機能改善のための啓発活動に努めることとする。

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

シルバー人材センター登録者の皆様の体力維持が客観的な測定結果から確認できたことや、「散歩を始めた」等の行動変容に繋がる前向きな意見が得られたことは、本市の健康寿命延伸に向けた大きな成果であると考えます。

一方で、本事業の目的である多角的なフレイル予防の観点から、実施していただいた「睡眠・栄養・活動量の調査」や「基本チェックリスト」の結果について、体力測定結果との相関など、どのような傾向が見られたのか注視しております。また、参加人数の推移に関する要因分析や、「びわこいきいき体操」の自宅での定着状況などの具体的なデータにつきましても、今後の市の保健事業における基礎資料として活用させていただき、効果的な保健施策の展開に繋げていきたいと考えております。

報告書にある「就労状況と体力測定結果の関係性の検討」という次年度の課題に加え、上記の生活習慣に関するデータの詳細な分析につきましても、今後の事業展開や報告の中で深めていただくことを期待しております。次年度も引き続き、地域住民の健康増進に向けたお力添えをよろしくお願いいたします。

## 6. 課題、懸案事項


課題としては、シルバー人材センターの就労状況が、体力測定結果や筋の質と関係があるかを検討していきたい。就労のみならず、活動量と体力測定の結果を示すことで、日常での健康に関する意識づけにつながると考える。

(受講生募集のチラシ→)



## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 15

プロジェクト名（活動テーマ）： 学校部活動の地域展開に向けての仕組みづくり ～学校・地域・年代が繋がるスポーツ活動の場～	
SDGs 目標：	
提案者	： 竹内 早耶香
自治体担当者	： 北川 史也
連携大学担当者	： 岡崎 孝文

### 1. 取組体制

本事業は、大学・自治体・地域スポーツ団体・学校が連携しながら、中学校部活動の地域展開を見据えた新たなスポーツ活動の仕組みづくりを目的として実施した。

#### ① びわこ学院大学教育福祉学部スポーツ教育学科 竹内ゼミ

本事業の企画立案、スポーツプログラムの開発、教室の運営、活動の記録・分析を担当した。また、学生スタッフが指導補助として活動に参加し、地域スポーツ指導の実践的学習の機会としても位置づけた。

#### ② 総合型地域スポーツクラブ（モデルクラブ）

地域住民主体のスポーツ団体として、地域スポーツ活動の実施環境の提供、地域指導者との連携、参加者募集の協力などを担った。

#### ③ 東近江市文化スポーツ部スポーツ課

施設利用の調整、広報支援、関係機関との調整を担当するとともに、本事業の成果を地域スポーツ施策へ活かす観点から連携を行った。

#### ④ 協力中学校（朝桜中学校）

中学生への参加案内、施設利用の調整、安全面での連携などを行い、学校と地域が連携した放課後活動の可能性を検討した。

このように、大学・自治体・地域スポーツクラブ・学校の四者連携体制を構築し、地域で中学生のスポーツ活動を支える仕組みの試行を行った。

### 2. 背景・目的

全国的に中学校部活動を取り巻く環境は大きく変化しており、少子化による部員数の減少や教員の長時間労働などの課題を背景に、部活動の地域連携・地域移行が重要な政策課題となっている。

東近江市においても同様の状況が見られ、市内には7つの総合型地域スポーツクラブと9つの中学校が存在するものの、学校部活動を学校のみで維持することが難しくなりつつある。

一方で、総合型地域スポーツクラブは地域住民主体のスポーツ活動拠点として機能して

おり、地域資源を活用することで中学生の新たなスポーツ活動の場を創出できる可能性がある。

そこで本事業では、大学・自治体・地域スポーツクラブ・学校が連携しながら、放課後のスポーツ活動の新たな形を試行し、学校部活動の地域展開に向けた実践モデルを検討することを目的として取り組んだ。

具体的には、以下のような視点から事業を実施した。

- ・ 中学生のスポーツ参加機会の拡充
- ・ 放課後の多様な過ごし方の創出
- ・ 地域住民や大学生のスポーツ指導への参画
- ・ 地域スポーツ活性化と教員負担軽減の両立

### 3. 活動内容

本事業では、総合型地域スポーツクラブと連携し、中学生の居場所づくりやスポーツ参加機会の拡大を目的とした「放課後スポーツ体験教室」を実施した。

#### (1) 放課後スポーツ体験教室（第1クール）

##### 【概要】

事業名：放課後スポーツ体験教室

期間：2025年11月9日～11月26日（全4回）

場所：朝桜中学校体育館、蒲生体育館、蒲生コミュニティセンター

対象：中学生（延べ17名参加）

スタッフ：教員1名、学生スタッフ5名

協力機関：東近江市スポーツ課、あかね総合型地域スポーツクラブ、朝桜中学校

授業が5時間で終了し部活動がない日に実施し、放課後時間を活用したスポーツ活動モデルの試行を行った。

##### 【プログラム内容】

各回の教室では以下の3段階構成で活動を行った。

##### ① 導入（アイスブレイキング）

レクリエーションやウォーミングアップを通して、参加者同士の交流を促進し、活動への心理的ハードルを下げる工夫を行った。

##### ② メイン活動

スポーツ鬼ごっこやアルティメットなど、初心者でも参加しやすく、協力やコミュニケーションを促すスポーツ活動を実施した。

##### ③ ふりかえり

活動後に感想共有の時間を設け、大学生と教員がファシリテーターとなり、活動を振り返る対話を行った。

#### (2) 放課後スポーツ体験教室（第2クール）

第1クールの実践を踏まえ、活動の継続性と改善を目的として第2クールの教室を実施予定である。

実施日：2026年3月18日、3月23日、3月24日

第1クールで得られた参加者の反応や運営上の課題を踏まえ、プログラム内容の改善および参加者の拡大を図る予定である。

#### 4. 目的の達成状況、成果

本事業を通して、学校部活動の地域展開に向けた初期的なモデルを試行し、以下の成果が得られた。

##### ① 中学生の新たなスポーツ参加機会の創出

部活動とは異なる形でスポーツに参加できる場を提供することができた。競技志向ではなく楽しさや協力を重視したプログラムとすることで、スポーツ経験の有無に関わらず参加しやすい環境を整えることができた。

##### ② 大学生の地域スポーツ参画

大学生が指導補助として活動に参加することで、地域スポーツに若い世代が関わる機会を創出するとともに、スポーツ指導や地域連携の実践的な学習機会となった。

##### ③ 地域連携体制の構築

大学・自治体・総合型地域スポーツクラブ・学校が連携した活動体制を構築することができ、地域スポーツ資源を活用した放課後活動の可能性を確認することができた。

##### ④ 安心して参加できる少人数活動の有効性

少人数での活動により、参加者同士の関係性が築かれやすく、安心して参加できる環境（居場所機能）が形成されることが確認された。

#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

本事業は、大学・地域スポーツクラブ・学校・自治体が連携し、中学生の新たなスポーツ活動の場を試行した点において非常に意義のある取組であったと考えています。特に、「楽しさ」や「交流」を重視したプログラムにより、スポーツ経験の有無に関わらず参加できる環境が形成され、中学生の放課後の新たな居場所づくりとして一定の成果が確認できました。また、大学生が指導補助として参画することで、地域スポーツを支える人材育成や若い世代の地域参画にもつながる可能性が見られました。

現在、全国的に中学校部活動の地域連携・地域移行が進められる中、本事業で得られた実践的な知見は、東近江市における地域スポーツ環境の整備や地域クラブ活動の推進を検討していく上でも重要な示唆を与えるものです。

今後は、参加者確保の方法や継続的に参加できる仕組み、運営体制の確立などの課題を整理しながら、総合型地域スポーツクラブ等と連携した持続可能な地域スポーツ活動のモデル構築に向けて、本取組の成果を活かしていきたいと考えています。

#### 6. 課題、懸案事項

本事業を通して以下の課題が明らかとなった。

##### ① 参加者の安定確保

参加人数が限定的であったため、参加者募集方法や学校との連携のあり方を改善する必要がある。

##### ② 継続参加の仕組み

単発参加型の教室では参加者の定着が難しい場合があり、継続的に参加できる仕組みづくりが必要である。

### ③ 持続可能な運営体制

地域スポーツ活動として継続するためには、指導者確保や運営体制の整備が重要である。

〈今後の展開（次年度事業との連携）〉

本年度の成果と課題を踏まえ、2026年度は活動モデルの質向上と持続可能な運営体制の確立を目的として事業を発展させる予定である。

具体的には、

- ・ 定員 10 名程度の少人数プログラムへの再設計
- ・ 参加者同士の関係性構築を重視した継続型活動
- ・ 継続参加率や満足度などの評価指標による効果測定
- ・ 運営手順、安全管理、指導方法を整理した標準化マニュアルの作成



などを実施し、「拡大型」ではなく「質保証型モデル」の確立を目指す。これにより、将来的には総合型地域スポーツクラブを基盤とした持続可能な地域スポーツ活動モデルとして他地域への展開も視野に入れた実証データの蓄積を図る。

〈活動の様子〉



## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 16

プロジェクト名（活動テーマ）： 高校生をはじめとする一般市民への出張型心肺蘇生(BLS)講習	
SDGs 目標：	 
提案者	: 救急医療研究サークル SALSА 代表 加藤幸太郎
自治体担当者	: 滋賀県教育委員会事務局保健体育課 指導主事 水上 友紀子
連携大学担当者	: 滋賀医科大学学務課学生支援係 北川慎悟

### 1. 取組体制

滋賀医科大学救急医療研究サークル SALSА が活動の主体として活動の指揮を執る。SALSА メンバー以外にもインストラクターのメンバーを募る必要がある際は、滋賀医科大の学生有志を募り、全学的に心肺蘇生講習を行う。

### 2. 背景・目的

高校の学習指導要領では心肺蘇生法が授業の一環として設定されているが、教員・資材不足で座学のみでの授業や、簡易的な実技講習が行われるに留まることが多い。医学科生・看護学科生がマンパワーを活かし出張型での BLS 講習を行うことで、いざ「心肺停止の患者」と遭遇した際の適切な対応を高密度・高品質で身につけることができる。

### 3. 活動内容

本事業の主たる活動として、以下の通り出張型の BLS（一次救命処置）講習を実施した。

#### 【実施概要】

- 日時：2025 年 12 月 19 日（金）
- 場所：滋賀県立八日市高等学校
- 対象：同校 野球部および剣道部員 計 39 名
- 指導体制：滋賀医科大学 医学科・看護学科学生 12 名（SALSА メンバー中心）
- 内容：1 時間の BLS 実技講習

#### 【指導の工夫とタイムスケジュール】

- 導入・講義：代表学生（加藤）より、一次救命処置の重要性と胸骨圧迫から AED 使用までの全体的な流れを説明。
- 小グループ実践（講義⇔実践の反復学習）：高校生 3～4 名に対し、本学の学生インストラクターが 1 名つく小グループ体制を構築。胸骨圧迫や AED の使用方法について、説明と実践を細かく行き来する形式をとり、受講者がトレーニング用マネキンに触れる時間を最大限に確保した。

- **総合シミュレーション**： 講習の集大成として「救急車到着までの10分間を想定したシナリオトレーニング」を実施。実際の現場を想定し、グループ内で役割分担を行いながら一連の救命処置を連続して行う訓練とした。



#### 4. 目的の達成状況、成果

##### ① 高密度・高品質な実技指導の実現（マンパワーの活用）

高校生3~4名に対して医療系学生1名がつくという、教育現場単独では実現が困難な「超少数人数グループ指導」を達成した。これにより、生徒一人あたりの実技時間を大幅に確保でき、「座学や簡易的な実技に留まる」という学校現場の課題を直接的に解決する高品質な

講習を提供できた。

### ② 実践力の向上と主体性の喚起

講習の最後に行った 10 分間のシナリオトレーニングでは、参加した高校生が互いに声を掛け合い、協力して目の前の命を救おうと没頭する姿が見られた。医療系学生がインストラクターとして伴走することで、生徒の真剣な眼差しと主体性を引き出し、「いざという時に動ける実践力」を身につけさせるという本事業の目的を十二分に達成した。

### ③ 社会的波及効果とメディア掲載

本取り組みの社会的意義が高く評価され、メディアおよび大学広報にて紹介された。これにより、地域における本事業（およびコンソーシアムの助成）の認知度向上に大きく貢献した。

新聞掲載： 中日新聞（2025 年 12 月 25 日掲載）にて、本学学生が指導する様子が報道された。

大学広報： 滋賀医科大学公式 HP「フォトニュース」にて活動内容が掲載された。



## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

生徒は、年齢の近い医科大学生から直接指導を受けたことで、生命を大切にしようとする意識が一層高まった。学校担当者からは、教科で学習した知識と今回の実技演習が結び付いたことで、日常生活の中で「もし身近な人に何か起きたときには、周囲と協力しながら行動したい」という意欲が高まった様子が見られたとの報告を受けている。

また、大学生が小グループで丁寧に指導する環境は、生徒一人ひとりの疑問や不安に寄り添いながら学びを深められる点で大変有意義である。年齢の近い若者同士が、生命の尊さについて語り合える場としても価値が高く、生徒の主体的な学びを促す取り組みとして評価できる。

## 6. 課題、懸案事項

### ① スケジュール調整と持続的な人員確保

今回は「インストラクター12名で高校生39名に対応する」という理想的な比率を実現できたが、対象人数が100名規模の学年全体講習となった場合、必要となる学生インストラク

ターの数も膨大になる。本学学生のカリキュラムの合間を縫って、多数の指導者を安定的に確保するための、人員確保が今後の課題である。





## ② 高等学校における実施時間の確保とカリキュラムへの組み込み

本事業が目指す「高密度・高品質な実技講習」を実施するには、十分な講習時間（最低1時間程度）の確保が不可欠である。しかし、高等学校の既存の授業枠（体育や保健等）に、外部からの出張講習を新たに組み込むことは、年間カリキュラムの都合上、容易ではないケースが多い。

今回の八日市高校での実施のように、放課後の部活動の時間帯を活用するなど、授業枠にとられない柔軟な実施形態の模索が今後の重要な鍵となる。より多くの生徒に受講機会を提供するため、学校側の負担になりにくい時間帯や枠組み（長期休暇中の講習、特定の部活動や委員会へのアプローチ等）を提案し、双方が実施しやすい連携モデルを構築していくことが課題である。

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

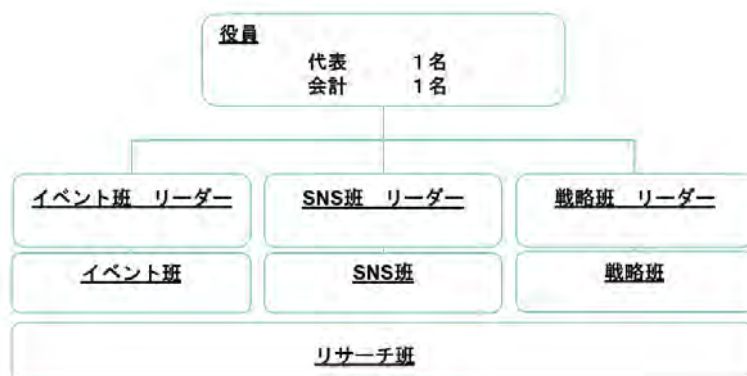
No. 17

プロジェクト名（活動テーマ）： 膳所・平野地域の思春期世代の子供たちがトラウマインフォームドな大人たちと関われる、 落ち着ける第三の場所づくり「あかり」 〔SDGs 目標番号：3, 10, 16, 17〕	
SDGs 目標：	   
提案者	：メンタルヘルス研究会 HAMMOCK 内部団体「あかり」 亀田隼大
自治体担当者	：大津市子ども未来部子ども総合支援局子ども・子育て安心課 課長 西 健次
連携大学担当者	：滋賀医科大学学務課学生支援係 北川慎悟

### 1. 取組体制

下図に示す組織体制で運営している。イベント運営を中心に行うイベント班、Instagram や HP 作成を中心に行う SNS 班、長期的な活動方針を検討する戦略班、子どものころに関する情報の調査を中心に行うリサーチ班の 4 グループに分かれて、活動を実施している。

- ・代表：亀田隼大（医学科 6 年）
- ・会計：荒木泰人（医学科 3 年）
- ・サポーター：滋賀医科大学精神医学講座 増田史先生



### 2. 背景・目的

現代の若者を取り囲む環境は厳しい。小中学校における不登校児童生徒数は 12 年連続増加し、過去最高を更新し続けている<sup>1)</sup>。逆境の小児期体験（ACEs）研究では、小児期に虐待や家族の機能不全などの逆境体験を経験すると、問題行動の出現や肥満、糖尿病、うつ病、がんなどの罹患率が上昇することが明らかとなっている。約 3 人に 1 人が 18 歳までに 1 つ以上の逆境的体験をしているという報告もあり<sup>2)</sup>、看過できない問題となっている。逆境的体験のケアとして、保護的体験の積み重ねが重要視されている。そのため、若者の居場所づくりが推進されているが、大津市平野学区や膳所学区では学校数に対し、若者の居場所が少ないと私たちは考えている。

そこで本会は、主に大津市平野学区および膳所学区の思春期世代の児童生徒・若者を対象に、各地域でリラックスできる場所の提供と、こころに関するヘルスケアの情報発信を通じて、若者たちが学校および自宅以外で「心の平穏をつくる」支援をすることを目的としている。思春期世代をターゲットにしたのは、思春期の苦悩と孤独に対し、年齢的に本学学生が近い目線で考えることができるためである。ただし、多くの若者に、少しでも心が落ち着く場所をつくりたいという考えで活動を行っており、精神科領域の医療介入を目的とした団体ではない。

### 3. 活動内容

#### 【地域の若者に向けた活動】

- A.若者の第三の居場所づくり「あかり cafe」
- B.「心の平穏を保つ」ための情報発信(Instagram)

#### 【所属学生に向けた活動】

- C. 所属学生のための勉強会実施
- D.地域の福祉関係者との交流

### 4. 目的の達成状況、成果

#### A 若者の第三の居場所づくり「あかり cafe」

膳所公民館・平野コミュニティセンターをお借りして、第三の居場所「あかり cafe」を、2025年3月から月1回の開催を目安として合計6回開催した。中高生の参加者数は合計4名、関係者の見学数は合計7名。参加者を対象にしたアンケートでは、「満足度を教えてください（5段階評価で5が最も良い）」の質問に3名が「5」、1名が「4」と回答した。「今後も参加したいか」の質問には4名とも「はい」と回答した。



#### B 「心の平穏を保つ」ための情報発信(Instagram)

Instagramの団体アカウントを用いて、「心の平穏を保つ」ためのセルフケアの方法を発信した。具体的には、滋賀医科大学精神医学講座、増田史先生の著書より、セルフモニタリング、マインドフルネス、理的危機対応プラン（Psychological Crisis Coping Plan: PCOP）7の内容について、オリジナルキャラクターを活用しながら、わかりやすく紹介・実践した。2026年2月時点でフォロワー数は208人。



### C 所属学生のための勉強会実施

団体所属学生のセルフケアに関する知識習得のため定期的に勉強会を実施した。また、2025年8月・9月には、小児科医の小林穂高先生、家庭医の柏崎元皓先生を講師としてお招きし、若者や不登校の子どもへのかかわり方について講演会・勉強会を実施した。参加した学生へのアンケートでは「不登校への子どもに対する接し方を日々診療にあたっている医師の視点から知ることができ勉強になった」等、勉強になったという回答が多くあった。

### D 地域の福祉関係者との交流

活動を通して地域の医療・福祉関係者とのつながりができた。活動に対する知見を広めるために、団員それぞれが県内外のフリースクールや居場所づくり、地域福祉に関するイベントへの訪問・見学を実施した。見学後はそれぞれ所見を団内で共有した。

## 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

子どもや若者が成長する中において、「心の平穏をつくる」ことはとても大切です。今年度、若者の第三の居場所づくりや情報発信、勉強会の取組を実施されたことに加えて、活動を通して地域の医療・福祉関係者とのつながりが出来たことは、貴重な成果だと思います。今年度の取組で得た成果から、子どもや若者が抱える背景に更に目を向けていくことで、みなさんの活動とこれからの歩みが、子どもや若者の安心につながるとともに、地域・社会、人と人とのつながりにも広がっていくものと期待しています。

## 6. 課題、懸案事項

あかり Café 参加者数の伸び悩みが課題である。対策としてホームページの設置やイベント告知先の拡大など広報活動の強化を検討している。また、2025年度下半期には新しい拠点として空き家をお借りし、より中高生のニーズに沿った充実した活動を行えるように整備を進めている。

### 参考文献

- 1) 文部科学省.令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要. ([https://www.mext.go.jp/content/20251106-mxt\\_jidou01-000045738\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20251106-mxt_jidou01-000045738_3.pdf)) (2026.2.13 参照)
- 2) 三谷はるよ. “第2章 ACE の社会経済的地位への影響”. ACE サバイバー: 子ども期の逆境に苦しむ人々. 筑摩書房. 2023, 67-90.

## 2025 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 18

プロジェクト名（活動テーマ）：じぶんごと Café(コミュニティの場を創る)	
SDGs 目標：	   
提案者	：国際保健・地域医療研究会 TukTuk 大坪琉奈
自治体担当者	：大津市健康福祉部保健所地域医療政策課 友岡昌代
連携大学担当者	：滋賀医科大学学務課学生支援係 北川慎悟

### 1. 取組体制

本活動は、国際保健・地域医療研究会 TukTuk が主体となり、地域交流の場となる「じぶんごと cafe」を企画・運営しました。

実施にあたっては、学生団体びわふえすと連携し、「病院を『医療のハブ』から『地域のハブ』へ！」をテーマとした地域交流イベントを共催する形を取りました。じぶんごと café に加えて新しくメディカルマートという企画を平和堂さんと協働し、日常生活の中に医療体験の場を創りました。「じぶんごと Café」では、社会課題に向き合う学生団体を誘致し、各自のテーマにそって、じぶんごととして考えるワークショップを開く場をともに提供しています。

家族間で話すことのない健康に関する話題にゲームやカフェという場を通して触れることで、自宅等での健康意識の向上につなげています。

### 2. 背景・目的

近年、地域社会において、世代や立場を超えて人々が気軽に集い、交流できる「コミュニティの場」が減少しています。さらに、学生においても同じことが言えます。社会課題に向き合う学生団体は多々あるものの、その活動を情報発信したり、団体間や地域社会と交流したりする場は少ないという課題があります。

このような背景から、「じぶんごと Café」では、社会課題に向き合う学生団体を誘致し、各自のテーマにそって、じぶんごととして考えるワークショップを開く場をともに提供しています。

本活動は、このコンセプトのもと、「コミュニティの場を創る」ことを活動の軸に据えています。最大の目的は、「人と人を繋げる」ことです。ここでいう「人」とは、地域住民の方々に限らず、医学生や医療者も含め、普段は交わることのないカテゴリーを超えた多様な人々を指します。私たちは、このような新しい繋がりが生まれることが地域の活性化に貢献し、ひいては参加者一人ひとりの心身の「健康に繋がったら良い」との強い思いを持って、本企画を実施しました。

### 3. 活動内容

上記の目的を達成するため、じぶんごと café に加えて新しくメディカルマートという企画を

平和堂さんと協働し、日常生活の中に医療体験の場を創りました。

- 主な内容:

会場内に、来場者が肩の力を抜いて過ごせる「カフェ」のような対話空間を創出し、運営を行いました。ここでは学生スタッフが常駐して来場者を温かく迎え入れ、一人ひとりと丁寧に向き合い、何気ない会話を楽しむ空間づくりを徹底しました。

また、以下の団体を誘致し啓発活動を行い、この空間を活用して地域課題や活動に関する情報を掲示・発信することで、学生と住民、あるいは住民同士の対話が自然と生まれるような仕掛けを行い、社会問題を「じぶんごと」として考えるきっかけを提供しました。

- 虎姫高校「がんすごろくを用いたガンに対する啓発活動」
- WAKAZO 「LASTWORDS」
- 日時・場所: 2026年1月25日(日) 13:00~16:30、アル・プラザ瀬田 4F レストスペース
- 参加者:
  - 当日は62名の地域住民の方にご来場いただきました。
  - 運営は学生スタッフ10名(1大学・2高校から参加)が担当しました。

また、別地域でも以下のような地域交流イベントを開催しました。

- 日時・場所: 2025年10月5日(日) 10:00~16:00、徳田医院(くわくわ診療所)  
今回の「じぶんごと Café」では以下の団体を誘致し啓発活動を行っていただきました。
  - 虎姫高校「がんすごろくを用いたガンに対する啓発活動」
  - 若者にHPVワクチンについて広く発信する会 Vcan  
「知らないまま後悔しないで。医療系学生が伝えたい子宮頸がん予防」
- 参加者:
  - 当日は250名の地域住民の方にご来場いただきました。(目標300名に対し達成率83.3%)
  - 運営は学生スタッフ30名(4大学・2高校から参加)が担当しました。

#### 4. 目的の達成状況、成果

本イベントの実施により、以下のような成果が得られました。

第一に、「コミュニティの場」の創出です。カフェというリラックスした空間を用意したことで、イベントに訪れた地域住民や学生が足を止め、自然な形で会話が生まれる場面が見られました。

第二に、多世代・多職種の交流を促進できました。医学生や医療者、地域住民、高校生スタッフが、カフェのテーブルを囲んでフラットに交流し、「人と人を繋げる」という目的を達成できました。

第三に、「学びの場」の提供です。運営に携わった学生スタッフが、地域の方々と直接対話す

ることで、お互いに社会課題を肌で感じ、まさに「じぶんごと」として捉える貴重な機会となりました。



#### 5. 今年度の活動成果に対する自治体担当者のコメント

今年度も、カフェというリラックスした空間を通じて、市民の皆様が肩の力を抜いて医学生や医療者と健康について語り合い、考える機会を提供されたことは、非常に意義深いものと考えます。

今後は、この素晴らしい「場」が、さらに多くの市民の健康ニーズに応え、発展していくことを期待しております。特に、今回の活動を通じて明らかになった具体的な市民の健康課題やニーズをもとにテーマ設定する等、持続可能な形で活動を展開されることにより、皆様の活動が地域に根差し、市民の健康増進と地域コミュニティのさらなる活性化に貢献していただけたらと思っております。

貴研究会の今後のさらなる御活躍を心よりお祈り申し上げます。

#### 6. 課題、懸案事項

じぶんごと café を開催し、イベント内では家族やたまたま居合わせた方と健康について話す様子が見られました。加えて、イベント内でのゲームの簡易版を持ち帰ることができるように工夫したことで自宅での健康啓発につながりました。家族間での健康に関する話が増えた、という感想もいただきました。様々なテーマを取り扱う団体を招聘してイベントを行う以上、テーマを持って帰ってもらいやすい形に落とし込む必要があります。また、金銭面を主とした持続可能性への懸念があります。